驚くべき筈の事に驚かざるは、その人の驚かざるにあらず、その事の驚くに足らざるがためなり、天地こゝに崩れ來るも驚かずこは、うその皮なり、まことは骨も身も粉こなるほどの珍事出來に驚かざる人間のあるべきや、生來いまだ曾て醫藥の何物たるを知らざる六尺の丈夫兒も、鬢に二毛の白髮を生ずれば人生の或意味に於て驚かざるを得ず、百萬の兵を叱咤せし老將軍も窓外に散り來る桐の一葉には、うた〻無量の感慨に誘はれて何をか驚かざるを得ず、いかに外面は強くとも人間の裏面それ脆い哉、

調子

調子は程度なり、程度を知りて程度を過らざるものは圓滿なる常識の發達にして、人生に蹉跌なく齟齬なく、凡そ世の中に調子ほど難しきものなし、

この調子に乘り過ぎるものは必ず事を仕損じ、この調子に外れた奴は固より論なく、乘らず外さず、その間を巧に調子よく歩み行くもの、いはゆる居家處世の祕訣を得たりといふべし、

馬鹿こは物を知らざるのみならず、寧ろ馬鹿は案外の小理窟を捻り廻して、をり〳〵才子を凹ますほどの手柄を現はせど、奈何せむいかに敎へても諭しても馬鹿は萬事この調子に外れたり、

その馬鹿こ反對に才子才物いかに怜悧巧慧なるも、この調子を知らざれば何の用をなさず、たゞ徒らに却ッて入らざる面倒を惹き起すのみ、馬鹿の調子外れは無論その筈なれど、何事にも出來し立する才子才物の調子外れは猶更の厄介なり、

調子調合とは、多きに過ぎず少きに過ぎずして、よろしく事物の中庸を得たる鹽梅の意味なり、よく鹽梅を知るもの、よく天下を料理するに足る、芋の煮えたも御存じないとは、その家に於ける米鹽の出入も知らざる一家の主人なり、

彼奴、調子に乘ッて何をするか知れぬ奴とは、絲目の切れし奴凧、どこまで風次第に吹き飛ばさるゝか果のない人間なり、いよ〳〵彼奴あゝいふ調子外れに騒ぎ出したとは、物に狂うた荒馬と一般、おのれの鼻面を突き當てゝ倒るゝまでは、うか〳〵手の付けられぬ人間なり、

元來この調子なるものは、教へ得らるゝだけを教へし以上、もはや其身の智慮分別と多年の經驗上より自得するの外なし、つまり科學的の範圍を脱して人生の機微に於ける啊吽の呼吸なり、

調子外れの勉強は學生の頭腦を磨り潰して卒業の曉に廢物となり、調子外れの客ン坊は食ふものを食はずして醫者のために錢を取らる、社會いづれの方面にも此理を用ゐるべし、

調子に乘り過ぎしと調子に外れしとは違うて、こゝに調子づいたといふの一事は寧ろ歡迎すべし、をかしく調子づいたもの、變に調子づいたもの、わるく調子づいたもの、妙に調子づいたもの、此等は頗る警戒すべき危險分子を含めど、たゞ眞面目に調子づいたものは幸福の前兆なり、奮鬪勉勵、勇往邁進、元氣旺盛、進歩發達、いやしくも人間の向上は必ず調子づいて進み調子づいて行はる、悲觀煩悶、優柔不斷、躊躇逡巡、失望落膽、すべて人間の退歩は、この調子づくまでの間に於ける意氣銷沈なり、盆の上の豆さへ調子づけば面白く踊りて舞ふにあらずや、

調子づく以外、また調子を取るといふ事あり、よく調子を取れば玉乘りも綱渡りも首尾よく

藝當を演ずれど、もし調子を取損へば無事に剛れし聲の上さへ轉けて向脛を擦り剝く、うき世の調子が取れぬもの滿足に飯の箸も取れぬ筈なり、

結局、調子は以心傳心にして、いふにいはれざるところ卽ち調子これなり、かういふ調子にせよといはれて、さういふ調子に出來ざるものなり、もし其調子を學ばむとすれば、唯これ一意專心に自家の修養を積むべきのみ、修養の力よく意に天才を壓するに足るの外、これに敎ふべき言辭なし、

都合

都合は都ての理に合へるもの、不都合は都ての理に合はざるものなり、

萬事都合よく行けば平穩無事に頗る結構至極なれど、もし不都合だらけの不始末あらば、いづれの方面にも許さるべからず、

さらに都合は自己ばかりの便利でなく、多くは雙方ともに差支なき便利をいふ、

但し雙方ともに差支なき場合は、雙方ともに同じ資格を備へし場合なり、後進より先輩に向ひ若くは賴む方より賴まるゝ方に向うては、まづ自己の都合は偖置いて先の御都合いかゞと伺はざるべからず、先の都合の悪い時、無理に自己の都合ばかりを持ち出す奴、これを我まの無遠慮者といふ、

また都合とは、時と事と處とを具體的に示し得ざる場合に多く用ゐ、その時の都合次第、その場合の都合次第、その事の都合次第、いづれも未然未發に屬して加之も明白に解決と答辯とを與へざる語なり、いはゆる臨機應變を意味せり、

將來に屬して答辯を與へず解決を與へず唯これ臨機應變を意味せるものとすれば、凡そ人間の約束上に都合ほど危きものなし、

都合が悪かつたとの一言は、萬事の約束を取消し責任を免れ、どうも都合が付かないとの一言は、さも體裁よく他人の依頼を退け自己の迷惑を除くに足る、都合の一語は乞はるゝもののため偶に都合よく出來たれど、乞ふものゝため頗る不都合に出來たり、

元來この都合なるものは力めて遂ぐるの意にあらず、殆ど成行に任せる意なり、必ずしも熱心實行の誓言にあらず、いはゞ放任冷淡の結果なり、世間普通に於ける十中の八九、多くは頼まれて面前に謝絶し難き一時その場の遁辭なり、

さるを今日の世間、この薄弱なる都合の一言を前後左右の力として、何事も他人の都合に依頼せむとする馬鹿もの多く、獨立自營の奮鬪心なき徒輩は、由來この頼むべからざる都合のため常に蹴飛ばされて泣き面を曝せりあはれならずや、

自己の事を自己に行はず他人の都合を唯一の力とするもの、固より憫笑すべき愚物なれど、また頼まるゝもの唯これ都合の一語を以て一時の慰安滿足を與へ、さらに都合の一語を以て最後の落膽失望を與ふるは、安心さして置いて絞め殺すに似たり、必ず出來る筈の事も出來ざる事の多き人生に、成行次第の都合を以て哀を乞ふ弱者に對するは、あまりに殘忍冷酷の人情ならずや、寧ろ勵聲一番、その反動力と奮勵心とを喚起するがため大に喝破し大に叱咤し、眞正面より面の皮を剥いで二度と再び來らざる侮辱の下に追ひ拂ふべし、

この侮辱をうけて、なほ悟らず泣かず怒らず、追はれても追はれても再び三たび這ひ寄り來るものは、たとひ實際に都合を付けて與ふるとも、到底その都合上に都合よく居らざる不都合千萬な奴なり、さもなくば恥も外聞も顧みずして根氣よく相手を都合攻めに攻め落さむと

する圖太い野郎なり、

元來この都合なるもの、たとひ人に乞はずして自己みづから都合よく一時を凌ぐとも、その一時の都合を以て萬事の都合に安心すべからず、都合は殆ど僥倖に類せるもの、また都合は柳の下の鰌に似たり、さう度々うまい事のあるべき筈なく、たしかなる事も外れ易き世の中に、どうか斯うか都合の付いたくらゐで長き人生を渡らるべきや、ましてこれを頼母しからざる他人の御都合次第に取縋る奴、懸崖の枯枝に取縋るよりも危し、

世間の所謂る寄生蟲とは、多く他人の御都合に棲む蟲なり、いつ何時その御都合の不都合となるやも知らず、薄き人情の紙一枚に包まれて金城鐵壁と心得たる奴の哀れさよ、

もし他人の御都合を頼まむとすれば、おのれ既に自己の生命だけを自家獨力の下に置いて而して後、せかず急がず迫らず强ひず、その自家獨力以上の事を以て乞ふべし、乞ふものに見苦しき醜體なく、乞はるゝものに蒼蠅き面倒なく、こゝに始めて雙方の都合よき一事を産み出すべし、頼む方に頼む甲斐あり頼まるゝ方に頼まれ甲斐なくば、迚も都合の付くべき筈なし、

通人

通人は野暮の對照語にして、野暮を不粋とすれば、通人これ粋人なり、

もし通人なるものを大體に解釋すれば、うき世の萬事に淀まず躓かず圓轉滑脫として自由自在に歩き自由自在に通るもの、いはゆる人生の經驗者と稱すべく、學問上の學者にあらずして人間上の人間學、いづれか一課一級を無事に修めし卒業者なり、

されど世間の用語は、通人を以て花柳界の通曉者とせり、

人間の弱點を示すもの酒色の間にありとすれば、その花柳界に通曉するもの通人たるに相違なけれど、社會は決して花柳界のため左右さるべきものにあらずとすれば、通人の本意は寧ろ酒色以外に最も多く最も廣く最も深く通曉せざるべからず、たゞ華奢を誇りとせる花柳界の通人が世間の眼に立てるのみ、加之も酒色の間に溺れざるものを通人といふ、久米の仙人も女の白き脛を見るまでは仙人中の通人なりしが、その通を失うて下界に落ち來りし後は平凡の人間となりて、おまけに野暮の仲間入せり、

通人の通は事々物々に渥滯なく通るの意にして、また人生いかなる難關も苦にせず平穩無事に通ふの意なり、信用ある商人の通帳は現金を要せずして四方に通ずるが如し、

但し通りものも通り工合を知らざれば、あまりの眞一文字に通り過ぎて後戻りする恐れありあゝでもない、かうでもない果に窮して、ごうもならない通人は皆この類なり、あまり通を振廻し過ぎて通の種切れとなりし結果、動もすれば通人それ却ッて不通人となる、通の通たる所以は實に難し、

大智は愚物に等しきが如く、大通は寧ろ野暮に似たり、野暮の如く見えて野暮ならざるもの、これを眞の通人といふ、通人の如く見えて通人ならざるもの、これを半可通といふ、

半可通とは、物を知らずして識者顔する奴なり何事も出來し得ずして出來し顔する奴なり、入らざる他人の穿鑿に手を屆けて自己は頭の蠅も追へざる奴なり、わざと世間の萬事に反いて實は世間は耳目に入りたがる奴なり、眞の通人これに向へば、齒を浮かして遁げ出し、普通の人間これに向へば半狂亂と恐れて近づかず、聊か氣の早い者は横面の一打も喰はざるがたば承知せず、加之も本人は恥を恥と思はざるがため恥をかいた凡例なく、いよ〳〵濟まし込んで額を叩きながら獨り悦に入る奴なり、

これに反して眞の通人は、その通を以て他に誇らず、風俗言語、擧止動作、凡そ人事一切いづれの方面より見るも、わざとらしき體なく、殊更に備へたるこころなく、加之も居家處世の方便に達し、喜怒哀樂の感情に過たず、うき世の酸いも甘いも知りぬいて、鬼も佛も掌の中に丸め込み、洒々落々として、事物に澁滯せざるもの、宰相と談笑すべく學者と談笑すべく士人と談笑すべく商人と談笑すべく市井の無賴漢と談笑すべく花柳の美人と談笑すべく、天下いたるところ接するところ皆これ我友として談笑すべし、英雄と膝を交へて笑ひ馬鹿と手を取ッて笑ひ富貴と相對して語り貧乏人と相對して語るもの、これを通人といふ、もし君子に似たる小人ありとすれば、この通人なるもの、殆ど小人に似たるが如き大人なり、清濁ともに呑み込み善惡ともに相交はり、加之も濁れるために胃を損ぜず惡なるがために與せず、その清に命を保ち、その善に心を養ふ、つまり人體の食物に於ける消化力の强きもの

なり、常に新しき鰯の刺身を喫ひ牛乳を川ゐスープを吸うて海濱に居らざれば生命の危き肺病患者にあらず、たとひ麥飯に赤鰯を嚙るとも立派に滋養分を吸收すべき健胃の人間なり、この理を以て社會一般の人事一切に對するもの、これを大通といふ、

或人の曰く、通とは俗語の通じよき意味なり、何を食はしても毒にならず、胃の腑に停滯せず、それ相當に甘味と滋養とを取りし後、さッさと排濟物を排濟するもの、いまだ曾て通人に糞詰りなしと、

野暮

通人ならざるもの直に野暮ならず、通人と野暮との間に尋常人あり、野暮は尋常人を中間に

置いて通人に對するものなり、

野暮を大體上に一言すれば、いはゆる沒理漢なり、但し惡意を含める沒理漢は文盲の無賴漢にして、野暮は善意的に正直なる沒理漢なり、たゞひ善意と正直の間違ひより他に迷惑を及ぼす事ありとも、本人さらに御存じのないところ、これを野暮といふ、

世間の俗語に多く用ゐらるゝ野暮は、通人を以て單に花柳界の通人とせる如く、酒色の間に出入せず都門の風俗を解せざるものとせり、されど通人の人事一切に於けると等しく、野暮また人事一切の上にあり、

いはずとも知れた事を幾度も繰返して無用の心配するもの、もはや取返しのならぬ事に立騒いで今更ら無用の苦勞するもの、わざ〳〵時間と手數とを費して入らざる事に他の感情を害するもの、捨てゝ置いて濟むべき事を殊更に掘り出して入らざる面倒を惹き起すもの、手輕く出すべき物を出さずして最後に手重く拗ぎ取らるゝ奴、當然に取るべき物を取らずして恨み泣きの泣き寢入に終るもの、その他いづれも事々物々に必要なき文句多く愚癡多きもの、これを野暮といふ、

野暮また階級あり、野暮の最も正直に露骨なるものを生野暮と稱し、野暮の最も極度に達せしものを野暮の骨頂と稱し、野暮の聊か薄らいだものを野暮臭いと稱し、ちよいと見たばかりで野暮に見えざる野暮これを野暮ッたい奴と稱し、どう說いても諭しても頑として一切きかぬものこれを野暮固い奴といふ、

もし通人をして萬事お察しのよい人間とすれば、野暮は萬事お察しのない人間なり、通人は物事を知るがため人の知らざる心を勞する場合あれど、野暮は元來物事を知らざるがため自己が身に現在の痛みを感ずるまで平氣の平左衛門たる場合多し、野暮の利益なる點を擧ぐれ

ば、通人には許されざる事も、彼奴は野暮なりといふ一語を以て許さるゝにあり、承知の上では相濟まざるが故に智者の遁路は常に多く野暮を粧ふ、たまゝ通人その通に窮する事あるも野暮の窮せし實例は世間に尠し、野暮また時に取ッて人生の一活路なる哉、

通人に金なく野暮に金ある所以は、通人その金を浪費する意味にあらず金なくとも立つべく金あらば金の費途を多く知るがためなり、野暮は金以外に味方なく趣味なく、人を見れば盗賊と心得て年が年中その金ばかりに執著心を放さざるがためなり、加之も大金は野暮に宿せず寧ろ大金は大通に扱はる、唯これ野暮の慰安は自己その野暮を知らざるにあり、

されど野暮は自己の野暮に安んじて、人を害せず世を欺かず、その沒理漢たるも亦これ他より見たるのみ、本人さらに御存じのないところ頗る人生の幸福に生れたり、

たゞひ野暮に入らざる文句多く愚癡多しと雖も、本人は正に入るべき文句として加之も愚癡を愚癡とせざるところ、ますゝ野暮の徳なり、

野暮は學ぶべからず、但し世間より野暮といはるゝ人間、その野暮を氣にして妄に野暮を脱せむとすべからず、愚は愚を守るの智なること一般、野暮に生れたる野暮を守れば世の中に苦勞なく心配なし、

狂的

狂とは常識を破りしもの、普通の人情に飛び放れて相反せしものなれど、さらに的の一字を付して狂的といへば、全然これ醫學上の精神病者にあらずして、いまだ癲狂院の御厄介にならざるもの、いづれか一角の狂に類し狂に似たるをいふ、その甚しきものは半狂人なり、

狂的を善意に解すれば、熱心の極度なり、熱心の程度を踏み破りて極度なるがため、頗る危險分子を含みて、うか〳〵近寄るべからず、

されど一面また狂的は非常を意味す、非常は非凡なり、尋常人の驚くべき事は多く狂的より生る、國家に於ける國士の悲歌慷慨には必ず多少の狂的を含み、英雄豪傑の事を起して天下を動かすものも必ず多少の狂的を含み、學者の學理研究に於ける、發明家の獻身不撓に於ける冒險家の敢爲決行に於ける、その他あらゆる事業に對して凡そ世間の耳目に聳てるもの、乃至また美術工藝上の名匠と呼ばれ名人名手と稱せらるゝもの、いづれか狂的の一分子を含まざるものやある、只その狂的の社會を利し人道に合して善良なる方面に狂的なるのみ、我慾のために半狂人となり女色のために半狂人となるが如きは、狂的の最も醜悪なるもの、尋常でさへ始末に終へぬ奴が、その一事に非凡なるだけ猶更ら以て手も著けられぬ厄介者なり、

狂また國音相通ぜる興に等し、他人の狂とせるもの本人は興を以て進む、狂ます〳〵興を喚起し、興ます〳〵狂を喚起し、狂と興と相伴うて何物も顧みざる境に到る、これを善良に用ゐれば人生光輝の發電所なれど、これを不善に用ゐれば實に恐るべき人生罪悪の水源地たるなり、

盾は表裏を見ざるべからず物は兩端を叩かざるべからず、もし人間の時に當り事に當りて冷靜の必要ありとすれば、人間また時に當り事に當りて熱狂の必要あるべし、たゞ時を知り事を知りて緩急消長の差別あるのみ、絶えず常に冷藏庫の如く冷かなる奴と、絶えず常に煙突の如く熱を持つ奴とは、ともに半狂人を越して本狂人の部なり、熱中に冷あり冷中に熱あるもの、これを世の中の達人といふ、

病的

狂的は狂的その時と事とによりて頗る快味あれど、病的は一切いづれの方面にも取るべきところなし、

狂的は多く樂觀を以て元氣旺盛の極度に發するもの、病的は多く悲觀を以て意氣銷沈の極度に陷るもの、一は陽にして一は陰なり、一は仰いで突進し一は俯して居縮む、また狂的の誤れるものは馬首を翻すが如くに取ッて返す事あれど、びしよ〳〵と降り續きし五月雨の地に染み込むが如く自然と濕り勝なる病的は、人として殆ど快晴の期なく、加之も生理上の病氣にあらざるがため醫藥の效果なし、さりとて放任主義の養生させれば養生するほど猶更ら重く募る病なり、

煩悶病、悲觀病、沈鬱病、嫉妬病、遊惰病、戀愛病、虛榮病、詔諛病、此等は今日の社會に最も蔓延せる流行病なり、流行の激甚なる結果、寧ろ他人の快活なる無事息災を怪しみ、いやしくも多少この病的に感染せざるものを不思議がりて、事物に感ぜざる神經の遲鈍者といふ、

むかし丹波の山奥に一目の不具者のみ住める村落ありと聞き、兩目の眞人間これを生捕らむとせしに、全村その二目に驚いて化物が來れりと立騒ぎし一例は、正しく今日この病的に對する好話柄なり、

いかに猛烈なる猖獗を逞しうするも、いまだ曾て全國民の一割を犯し得ざる市井の流行病と傳染病とに對して、内務省に衛生局あり各縣に衛生課あり更に個々必要上の醫術醫業を保護し奬勵せる今日、うか〳〵すれば全國民たるべき今日の青年男女に此寒心すべき病的の蔓延

せるを恐れざるは何ぞや、これに對して遠慮なく假借なく最も細密周到なる嚴格の衞生局なかるべからず、たゞ單に風俗壞亂を以て風俗壞亂の出版興行を停止し禁止するが如きはいろは比喩に所謂る二階からの目藥なり、

今日の青年男女に腐蝕せる病的の原因は、十中の八九、その多くは統一を缺ける破片的の文學上より來れる餘弊なり、わけて綜合を缺ける斷片的の小說上より來れる中毒なり、

この文學も小說も人間の產物たる以上は、人間の趣味たらざるべからず、人間の利益たらざるべからず、さるを今日の文學に於ける小說に於ける、動もすれば社會を忘れ人間を忘れて社會以外の妖怪に接し人間以外の化物に近づかむとす、否、實は社會の一部を知るも社會の全般を知らず人間の一部を知るも人間の全體を知らざるもの容易に心安く文學者と稱し小說家と稱し得らるゝがためなり、あまり簡單に便利に文學者たり小說家たるの結果、世間しらずの本人いよ〳〵我は天才なりと濟まし込む割合に廣き實際の世間ます〳〵これに重きを置かず、學問を仕損ねて腦髓に多少の異狀あるもの始めて文學者たり、小說家たりと冷罵を憚らざるに至る、

彼等その彼等以外を知らざる文學を以て小說を以て彼等の一身上に、止むれば殆ど蒼海の一粟に過ぎず九牛の一毛に過ぎず、國民中の最小部分にして加之も他に害を及ぼさゞれど、奈何せむ、彼等は筆を執り作を著はし世に布くの便あり、これを喜び、これを迎へ、これを讀み、これに憧れ、これに醉ひ、これに溺るゝものは、多く意思いまだ定まらざる人間の初階級にして、つまり空虛なる器に何物か容れむとする青年男女とすれば、危險これより甚だしきものなし、

漫然さらに言論出版の自由なる眞理を以て放任すべからず、言論出版の自由には自由なる所

以の理を伴はざるべからず、咄々これが責任者いづくにある、そも〳〵何を坐睡りて何を夢みるや、

吝嗇

吝嗇はやぶさか、をしむ、いやし、うらむと訓む、いづれも厭ふべき文字を重ねて、俗語これを一口にけちといふ、

吝嗇は、いかなる場合も自己以外を顧みずして唯これ自己の利益一點のみに執著し、加之も其利益を自己の必要にさへ供し得ざるもの、何のために世間の義理人情を缺いて物を惜しみ物を蓄へ物を集め物を積むか、迚も當識の判斷を以て解すべからざるもの、いはゆる有財餓鬼の極端にして、實は人間中の最も憫れむべき人間なり、

これは小説にあらず、事實談なり、有名の吝嗇家を以て百萬以上の財産を積みし或老爺、將に死せむとする時、氣息奄々の枕頭に一子を呼んで曰く、我うまれて七十五歳の今日まで未だ曾て鰌といふ魚の味を知らず、せめて現世の思ひ出これを死土産に一口なりとも鰌を食ひたしと、一子おもはず容を改め父の顔を打守りて曰く、さて〳〵贅澤な事をいはるゝ、鰌を食うても生命は延びませぬぞと、きくや否その老爺、むくりと病床の上に起き直りて曰く、やれ〳〵安心した、もはや死んでも後は大丈夫、思ひ置く事なし、實は汝の氣を試して見たばかりぢやと、その夕暮に睡るが如く死せり、吝嗇も吝嗇こゝに至りては殆ど事實にあるべからざる吝嗇なれど、重ねていふ、これは小説にあらず實際の事實にして、現在その一子は今日その家の主人公なり、

この父子の如きは世間の所謂る吝嗇にあらず、到底この父子以外に出來得べからざる事なれど、たま〳〵到來せし菓子を自己も食はずして腐敗せし後、これを始めて召使に與ふる吝嗇家は珍しからず、恥も外聞も忘れて世に反き人に笑はれながら、それを承知の上に出すべきものを出さず、動もすれば喧嘩に血を流しても鐚一文を惜しむ奴あり、甚だしきは父母に對し兄弟に對し妻子に對しても吝嗇の結果、自然の人情を踏み破りて何ども心得ず寧ろ平氣に好んで他人となる奴あり、まして始めより他人の知己朋友に遠慮會釋のあるべき筈なく、實は自己みづから食はず飲まずに生きて居たいといふ奴、いかに性質とはいへ、あまりに淺ましき次第ならずや、

多少と大小の相違あれど、この淺ましき人間は世間に尠からず、加之も吝嗇家は常に儉約家の假面を被れり、曰く眼前の無用を節して他日の有用に供するためなりと、何ぞ吐す事の横著にて、狡猾なる、彼等は生涯その有用を知らずして無用に物を惜しみ無用に物を蓄ふる奴なり、されど既に世間より吝嗇家といはるゝを承知の上の吝嗇家は寧ろ怪しむに足らず、たゞ怪しむべきは吝嗇といはるゝを最も自己の恥辱とし最も自己の苦痛として、加之も吝嗇は經濟の本意に叶はず人間いづれの道にも最後の利益ならざるを知りながら、不思議に吝嗇なる奴あり、かゝる奴は殊更ら人に向うて無垢著の風を粧ひ、わざ〳〵他人の吝嗇を笑ひ他人の吝嗇を罵り、さも放膽らしく、さも大樣らしく、さも豪傑らしく、甚だしきは仁俠を口にし慈善を說いて其間に自己の吝嗇を行ひ自己の吝嗇を遂ぐ、つまり智慧分別のある奴が苦心慘憺の吝嗇にして、物質上の吝嗇と心理上の吝嗇とを兼備せる入念の吝嗇なり、いかに大事を企つるも吝嗇のために破れ、いかに奮鬪するも吝嗇のために倒れ、いかに緻密細心を以て用意周到なるも唯これ吝嗇のために潰えて、到底その志を成し得ざるもの、惜しい哉、世間に尠

からず、

吝嗇は結局その人の性なり、加之も容易に改め難く脱し難き性にして、また強ち利害得失の數に關せず消長の理に關せず、いはゞ殆ど先天的に享けたる一種の不幸といふべし、

金錢上に吝な奴は必ず事業上にも吝なり、出すべきものを出し得ざる奴は取るべきものも取り得ざる奴なり、人間は常に絶えず何等かの取捨と出入とを以て生活するものとすれば、捨つる事と出す事を知らざるもの、いかで取る事と入る事を知るべき、この理に於て吝嗇は最後の打算を解せざる愚者の業なり、

たとひ一時は吝嗇のために吝嗇ならざるものより多く效果を得たるが如きも、その效果は必ず生涯を保つべき永久の效果にあらずして、つまり不自然の行爲は自然の數理に征服せられざるべからず、かの鰥を以て有名なる父子の如きは、殆ど吝嗇の權化物として現世に出現せしものなれど、それさへ憐れむべし際限ある財産を積めるのみ、加之も天は積みし本人に一文の自由も與へず唯これ積んで守らせるのみ、もし父子二人あれほどの非凡なる意志の鞏固を以て他に向へば、吝嗇ならずして得るところ更に大なるべきを、奈何せむ吝嗇なる奴は吝嗇以外に智力なし、

鄰家の金槌を借らむとせしに、鄰人その用を問ひ釘を叩くと聞いて貸さず、さらば仕方なしと始めて自己の金槌を用ゐしが如き、馬鹿げたる一場の笑話なれど、貸す奴もし竹釘ならば嫌々ながら近所の義理に貸さむとし、借る奴また竹釘にあらず金釘なるがため鄰人に借らむとせし吝嗇と吝嗇との醜を巧に穿てり、

金槌は固より釘を叩くべき道具なれど、竹の釘を叩けば金槌の減らず金の釘を叩けば金槌の減るを恐れて、この理を人事一切いかなる場合にも強ひて行はむとするもの、そも〳〵金槌

は何のために所有せるかは顧みるごころにあらず、これを吝嗇といふ、愚にして且また頗る頑強なるものなり、

儉約

儉約は所謂る節度なるもの、人間の生活上に無用の浪費を防ぐの意味にして、無用の浪費を防ぐは有用の出費に供せむがためなり、詮じ來れば能く集めて能く散ずるもの、これを儉約の遺憾なき道とす、料理屋に出入せずして自家の飲食に滿足するもの儉約の一例なれば、食ふものも食はずして病氣する奴、これは儉約の德にあらず吝嗇の罰なり、動もすれば世間普通この儉約と吝嗇との境目を間違へるもの頗る多し、

他より見て事業の大膽なるもの實は案外の緻密なる細心あり、その細心なくんば常に大膽を以て世を渡るべからず、されど多くは隱れたる細心を學ばず唯その現はれたる大膽を學ぶため、鵜の眞似をする鵜の水に溺るゝと一般、他より見て絶えず大金を容易に取扱ふもの實は人の知らざるところに其身の儉約を守る、內に節制の儉約を守らざれば外に容易の大金を取扱ふべからず、さるを世間の近目野郎は唯その外面に容易なる點を學ばむとするがため、忽ち身代を叩きあけて其月の飯も食ひ兼ぬるに至る、非常なる勉强家たま〳〵浩然の氣を養ふ時、元來の怠惰者これに倣うて倒るゝが如し、

大事を企つるもの寧ろ小事を忽せにせず、大なる事業の破綻は多く却ッて小なる不用意に起る、橫綱を張る天下の力士も小石に躓いて轉ぶの理を知らば、巨萬の仕事に當るもの日常の小遣錢に窮して破るゝ所以なり、

但し儉約の目的は儉約そのものにあらず、もし儉約を直に其まゝの目的とすれば、儉約の極、或は吝嗇に入るの恐れあるがため、儉約また集散の智力と伴はざるべからず、つまり無用と有用とを過らざる分別の智を要し眼前を忍びて他日に備ふべき克己の力を要す、あまり人間萬事を儉約一方に注いで殆ど儉約の守衛となるが如きもの、子孫のために美田を買ふべしと雖も、その身の生涯あまり用心に過ぎて人間の活氣を失ひ社會の進歩に後るゝの憂あり、儉約また實は程度問題なり、貯へて用ゐるべき道を知らず集めて散ずる事を知らざるものは經濟の能力なき貯蓄家にして、人生に向上發展せむとするための儉約家にあらず、

儉約を以て唯これ單に生活の質素簡使を旨とし、また輕佻浮華の虚飾虚榮を去るのみの具となすは、無用を節するの意に叶へど有用に散ずるの意を達せずして、この儉約なるものを消極的に居縮めたる議論なり、何ぞ儉約の意義を擴張して積極的の雄飛に用ゐざる、兒童少年の貯蓄心を奬勵し過ぎて國家の元氣を失はしむるが如きは、角を矯めて牛を殺すの類と一般、

儉約の大義を知らず儉約の應用を知らざるものといふべし、

世には儉約を以て人間を押へ殺さむとするものあり、また其生涯を押へ殺さるゝ馬鹿ものあり、儉約は豈それ人の血色を奪ひ生氣を奪うて顔色憔悴たらしむるものならむや、寧ろ血色と生氣とを喚起して大に用ゐるところあらむがために必要なり、

儉約は天氣に雨傘を用意するが如し、降雨に出ざる奴、わざ〳〵何のために入るべき、

世辭

世辭は世に剛れたる辭なり、萬事萬端に角なくして圓く人の意に叶ひ人の心に喜ばるゝもの、

世辭また世事に通ず、

されど世間の實例に於て、所謂お世辭の宜い人は油斷すべからず、お世辭は多くの場合、その心にもない詔諛の意味を含みて何等か要求するところあるがため、うか〳〵これに乘れば必ず何等か仕てやらるゝの恐れあり、元來お世辭は士人の恥づるものにして凡俗うき世の小智慧に出づるものなり、たゞ人の面さへ見れば直に屁理窟を捏ね廻す奴よりは勝れるのみ、

お世辭を振蒔くことは、一人の媚を以て多數の相手に分配するもの、酒色の巷に遊冶郎を綾なすべき賣春婦の藝當のみに限られしが、近來は政治界に實業界に堂々たる髭面の大男として案外これを巧に利用するものあり、貴婦人と呼ばれ令孃と稱せらるゝ交際場裡には猶更ら以て間斷なく華かに賑かに用ゐらる、加之も今日これを唯お世辭といはず、互に敬意を拂へる紳士淑女の交換語といふ、お世辭の估券また俄に騰貴せりといふべし、

但し此お世辭は多く常に用ゐて功なし、なるべく尠く偶に用ゐて功あり、既に定評を下されたるお世辭家は、あまり敬意を拂ひ過ぎて得るところ甚だ薄弱なれど、いまだ曾て容易に口を開かざる人のお世辭は、相手を滿足せしめて得るところ頗る多大なり、お世辭の最も巧妙を極めて最も有力に用ゐらるゝ時は、いかなる强敵も殆ど我を忘れて一種の催眠術にかゝるが如し、お世辭また時に取ッて恐るべき哉、

されど願はくは人間その生涯に此お世辭なくして相手を喜ばせ相手を滿足させ、また時に相手を恐れしめたし、もし互に敬意を拂ふものとすれば、わざ〳〵自己を空しくして拂ふよりも、たゞ靜に受けて拂はれたし、

愛嬌

世辭愛嬌と稱して、出發點は同一なれど途中に相別れ、世辭は口に出で愛嬌は顏に現はる、
また愛嬌は男女の共通物なれど、その多くは女に效能ありて男に得るところ尠し、
愛嬌の溢るゝ女は、女として美人の部に屬すれど、あまり愛嬌の溢るゝ男は、男として寧ろ
男らしからざるものなり、
秋波を送り靨を浮べて物も得いはず恥かしげの媚嫵を呈するは所謂る人を惱殺すべき女の愛
嬌なれど、眞黑な髯面の野郎が變な眼付をして妙な工合に無言の齒を剝き出せば、見られた
ものにあらず、是に於て女の愛嬌と男の愛嬌とは全然これ別なり、
たとひ自然ならざるも女は表情を以て愛嬌を保ち得べきに反し、いかなる場合も男は自然を

離るべからずして、寧ろ無意味と無雜作との間に愛嬌あり、
元來この愛嬌なるもの、人間に無くて叶はざる必要の條件にあらず、否、境遇と地位により
ては愛嬌のため却ッて品性を損ずる事あり、愛嬌を以て他の缺點を補ひ得べき女さへ、實際
の美人に愛嬌の溢るゝもの尠し、まして男たるもの人の感情を害せざれば足る、何ぞ殊更に
愛嬌なきを憂ふべき、いたるところ接するところ無愛嬌な奴は好かれざるも、好かれざるを
强ひて好かれむとすれば、いよ〳〵以て好かれざるに至る、ごうせ愛嬌なくして好かれざる
もの、今更ら愛嬌を學びて好かれむとするは愚の極なり、あくまで持前の無愛嬌を振廻し遠
慮なく其無愛嬌を以て押通すべし、これ却ッて無愛嬌者の愛嬌ある所以にして、天下に茶人
の多き、また案外の風流氣を出して買ふものなきにあらず、
男として女に好かるゝもの色白の美男に世辭愛嬌の巧なるよりは、寧ろ無愛嬌者の無意味と

無雜作ごに多しごいふ、愛嬌なきもの心を強くして可なり、

されご世には愛嬌商賣ごいふ一種の營業者あり、つまり自己の意志を枉げて他人の歡心を迎ふるもの、たごひ蟲の好かぬ奴にも世辭を並べ愛嬌を呈して衣食するもの、これは何ごして も愛嬌なかるべからず、その他に於て愛嬌は殆ご男子の不用物なり、

また男ごして愛嬌なくば世に立たれざるもの、實は愛嬌ありごも立派に獨立獨行すべき筈なく、その多くは無愛嬌者のために顧使せらる、結局この愛嬌は弱者より強者に向うて何等か哀を乞ふべき一の獻上物なり、

但し強者より弱者に向うて愛嬌を蒔く事あり、これは何等か約束以外の使命を仰せ付けらる る前、まづ其心を喜ばしむる下され物なり、

賣春

賣春、春を賣るごは春情を鬻ぐの意味、婦德第一の貞操を牛肉の切出より安直に手輕に切賣するものにして、いはゆる淫賣なり、これを筆にするも汗はしけれご、悲しい哉、今日の青年に對する墮落の一原因ごして、淫賣婦は見遁すべからざる一種有力の對照物たるを奈何せむ、

警官の眼よりは鑑札の有無を論じて、娼妓を公娼ご稱し淫賣を私娼ご稱し、世間一般の口よりは單に呼んで地獄ごいふ、落ちて浮かばぬ意味を含み、また淫を賣る方よりは迷ひ來る亡者を引ッ捕へて遁さぬ意味なり、

されご賣春婦を以て直に淫奔の結果その罪を本人に歸するは、寧ろ人生の裏面を解せざる酷

評にして、彼等は實に世の中の悲慘なる運命に囚はれしもの、加之も其運命と戰ふべき力なく、其運命を脱すべき幸なく、何物にも救はれず其まゝ捨てられて、生きながら社會の闇黑面に葬られ、唯これ一時の獸慾を逞しうするものゝため手荒き玩弄物に供せらる、一方に氏なくこも玉の輿に乘る女ありとすれば、女として人生の悲痛慘憺これ以外になき不幸の極點なり、あはれむべき一種の檻に投ぜられて、いとふべき一種の聲に泣くが如く訴ふるが如く客を呼び淫を賣るところ、もし父兄をして一目たりとも見せしむれば、果して如何、彼等また人の子なり、

されど既に淫賣婦たる以上、もはや醜に入りて醜に化し醜を知らざるもの、知らざるのみならず寧ろ其醜の多きを誇りとして其醜に勉強し其醜に努力するもの、彼等の過去に於ては同情すべきも現在に於ては一滴の涙を注ぐべからず、現在の彼等は恐るべき社會の害毒にして最も有力なる青年墮落の源泉なり、

彼等の集合せる魔窟は淺草の奥、いはゆる十二階下を以て第一とし、その數は實に三千人を超過せりといふ、一個所にして三千の賣春婦あり、都下の淫風魔界、いたるところを檢擧すれば、その多數なる幾萬に上るやも知るべからず、この幾萬の賣春婦が一騎當千の勢を以て盛に淫を賣り盛に毒を布く、今日の青年たるもの、殆ど自衛防禦の警戒網を突破せられたり、さらに驚くべく寒心すべきは、淺草の警察署に於て彼等の檢黴を強行せし時、その結果の意外なる、百人中に八十人以上九十人以下の有毒者を出だせしといふ、つまり三千人中の二千七八百人にして一萬人中の九千人内外に當る、その黴毒を有せざるもの僅に一割にして、加之も其一割さへ健全なるものにあらず、いづれも悉く病毒の第一期に近かりしといふに至りては、賣春婦これ直に黴毒の傳播所なり繁殖所なり、

また一方に於て徴兵檢査の結果は、年々歳々その體質の虚弱を示して、加之も黴毒性の患者その最も多きに居るこいふ、もし今にして救濟の道を講ぜざれば、たゞに一家一族の不幸に止まらず竟には國家の壯丁をして、元氣消滅せしむるの恐れあり、徴兵以外に於ける醫學の統計上、また青年患者の最も多き病名に黴毒性を擧げたり、淫賣婦こ青年の關係いかに密接なるかを知るべし、

さらに淫賣婦の年齡こ教育の統計表は、千人中に於て十五歳以上二十歳未滿は四百四十四人、二十歳以上二十五歳未滿は四百五十一人、合計八百九十五人の殘部百五人は三十歳以上五十歳未滿にして、その年齡より見るも淫を賣るに最も適せる容貌體質こ共に最も有毒傳播の强度なる時機なり、加之も千五百人の統計中に尋常小學校を卒業せしもの五百七十一人、高等小學校にありしもの二百十五六人、寧ろ富然に多かるべき筈の無智無學は却ッて四百九人こいふ案外の少數を示し、その他の二百六十四人は女子の專門學校より出でゝ所謂る女學生の墮落せしものなり、さらに驚歎また驚歎の外なきは、魔窟の主婦こ約束上、夜は醜態を極めて淫を鬻ぎ晝は處女を粧うて現在なほ學校に通へるものあるに至りては、たゞ唖然たるのみ、學資を得むがため人の妾こなり、さらに收入の多き邦人以外の妾こなるもの、今日の女學生に尠からざる事實を驚くは既に遲れたり、今や女學生の虚榮心は、淫賣婦たるも辭せざるものあるに至れり、

元來その業は無智文盲の無學にして足るべく、また無智文盲の無學たらざるべからざる淫賣婦にして、比較的、案外に教育をうけたるものゝ多きは、その年齡こ教育普及の關係ありこ雖も、以て其相手たる青年の十中八九、また無智文盲の勞働者よりも學生の多きを見るべし、これが原因たるもの、强ち金錢上の多少にあらず、公娼は遊廓の規則こして、いち〳〵登樓

姓名と容貌年齢を警察に屆け出でられ、加之も一夜同時に數人の客あるを厭ひ、これに反して私娼たる淫賣婦は外出の自由と祕密の便利を得るのみならず、さらに無用の飲食物を強ひられるゝがためなり、學生六分を占め商人と職人三分を占め、浮浪者と勞働者は僅に一分の割合なりといふ、

つまり今日の青年學生は意志の薄弱と品性の賤劣以外、墮落の原因たるべき第一は根性の吝臭きがためなり、何事にも難きを破らむとする男兒的の痛快なく雄壯なく、たゞ鼻頭の小智慧を眼前の情慾に注いで加之も僅の金錢上に自己の行ひ得らるべき範圍内を蠢動するがためなり、天下に女は多くして選取次第なり、もし女は覘はゞ何ぞ才色兼全の淑女を我專有物とせざる、もし今日これを我物とするの資格なくんば何ぞ奮鬪邁進して其資格を作らざる、今日の青年學生と雖も淫賣婦の醜にして毒あるを知るべし、その醜を知り毒を知りて猶これに耽溺するものは、目的の小なるがためなり、料簡の淺きがためなり、情慾の卑近なるがためなり、情慾とすれば情慾の快美なる滿足を他に取り得べき人間として、わざ〳〵殊更に自己の價値を下し最も手近に最も容易く最も下等に得むとするがためなり、

結局は今日の青年なるもの、絶えず入らざるところに威張り散らして傲慢不遜なれど、人間第一の强く跳ねて威張るべきところに案外その身を脆く弱く粗末に扱ひ過ぎたり、何ぞ威張るべきところに堂々と肩を怒らして大に威張り返らざる、寧ろ放蕩兒たらば一夜の酒色に千金を投じ一顧の下に萬金を以て阿嬌を購ふの勇氣あるべし、こそ〳〵と修業中に人しれず淫賣買するやうな吝な料簡を以て女に接する奴は、たとひ一家をなすとも必ず女房の尻に敷かれて日夜ぐうの首も出ざる奴なり、咄々、今日の青年なるもの、前途いかなる希望も快樂も自由自在に容認せらるべき社會に生れながら、淺ましや何として斯の如き下劣お手輕の間に

合はせに滿足するや、あまりに慾のない次第こいふべし、

犯罪

いはゆる道德上の罪にあらず、いはゆる宗教上の罪にあらず、こゝには法律上の犯罪をいふ、或學者の說には人間いづれも皆これ犯罪の性を帶びざるものなく、唯その教育こ境遇こ社會の制裁こにより て餘儀なく犯さざるのみこ、

また或學者の說によれば、凡そ罪を犯すもの、特殊の場合を除くの外は悉く一種の容貌風采を備へて、犯罪者には必ず犯罪者たるの骨相なるものありこ、

人間一切これ先天的に犯罪の性を帶びたりこするは、あまり人間みづから人間を見下げ過ぎて、もし人間以外の動物に聞かれたらば此上もない恥辱の至極なり、また犯罪者には必ず犯罪者たるべき一種の骨相ありこするは、たこひ多くの統計上に得たる立證にもせよ、人間お互に頗る危險千萬なり、もし不幸にして其骨相に適すれば、寧ろ人間の罪にあらずして骨相の罪こいふべし、この罪を背負うて監獄に投ぜらるゝがため、わざ〳〵この世に生れ來りしもの、いかにも哀れならずや、

されど蛇は蛇に生れたるかがめ多くの人に嫌はれ、毒蟲は毒蟲なるがために殺さる、また餘儀なき次第こいふべき乎、

社會の進步は犯罪の進步に伴ひ、世の中の智慧は罪を犯すの智慧こ競爭し、人事いよ〳〵發展して罪惡ます〳〵巧妙を極め、法律の精を加へて罪人の數を加ふ、蓋し善惡こもに分業の結果、おの〳〵專門に入る所以なり、

總ての犯罪者の研究は、これを社會學者と法律家に任じて、こゝには特殊の罪人たるべきものを考ふ、

特殊の罪人とは、特發の罪人なり、始めより犯罪の惡意なく、犯罪の準備なくして、唯その時と其場とに突發するもの、實は法律上の完全なる罪にあらず、殆ど我を忘れて無意識の無計算に犯すものなり、

無計算の一點より論ずれば、凡そ全國の監獄にあるもの悉く勘定しらずの無計算なり、いかなる强盜も竊盜も横領罪も、刑期中その獄中に勞働し驅役せらるゝ賃錢を以て監獄以外の相當代價に見積れば、犯罪の當時に得るところ頗る割合の惡きものなり、もし獄中の勉强力その三分の一を社會に費せば、わざ〳〵罪人たらずとも良民として立派に衣食住を支ふべく、その他あらゆる犯罪また獄中の苦痛と悔悟と前途將來の不利益とを數ふれば、差引勘定に合へるもの殆ど一人もなかるべし、

されど彼等は犯罪の當時その露顯を計算に入れざりしもの、つまり元來の惡意ありて罪を犯すの智慧あれど生涯打算の智慧なき大馬鹿者の遺算家なり、

こゝにいふ特殊の犯罪とは、元來の惡意なく加之も相當の教育あり相當の境遇ありて生涯打算の智慧なき馬鹿にあらざるものが、その場に我を忘れて突發の無計算に犯すものなり、

近來その最も手近に適切の實例として世人の耳目を聳動せしむるものは、いはゆる女の萬引これなり、頻々たる中には女子大學の生徒と稱せられしものあり、常に謹直の名を得たりし學校の女教員あり、一縣下に有名なる資産家を以て呼ばるゝもの〻令孃あり、敢て地位の低からざる官吏の夫人あり、其他あらゆる萬引なるものを檢擧すれば、いづれも貧窮無學の女子にあらずして、寧ろ相當の家庭に育ちしもの多しといふ、加之も其原因は憫れむべし皆こ

れ虚榮心のために總ての意識を奪はれしものなり、

淫賣を以て學資とせる女學生に一驚を喫せしものは、さらに新なる驚愕の怒濤を浴びて、虚榮心のため女子の危險界に入れる大膽の程度は、天下の父兄をして腸を寒からしむ、

男子の犯罪は多く自己より發して進擊的の態度に構成すれど、女子の犯罪は多く他より引き入れられて一時の感情的に行ふ、わけて呉服屋に於ける萬引の如きは、殆ど悪意を顧みるの遑なく犯罪と常識の間隔なく眼前たゞ其良心に痲痺を起して、いはゞ夢うつゝの幻影的に發せる行爲に等しきものあり、加之も近來の贅澤を極めたる呉服その他の陳列場は、殊更ら巧に女子の虚榮心を誘惑し挑發すべき方法のあらむかぎりを盡して、堅固なる宗教心と道德心のなきものに對し、動もすれば衆人の眼と法律の網とを脱せしめむとするが如し、さらぬも虚榮心の滿々たる意志薄弱の女子是れを買ふと買はざるの奈何に拘はらず、山の如く積んで自由自在の手に觸れしむ、危い哉、危い哉、

法律は既に犯せし罪を罰するに止まらず、道德上の支配を併有して將に犯さむとするものを第一に防かざるべからず、行政の急務さらに其要を認む、一方に虚榮心の犯罪者を出だすこと今日の如く殫々たる時、これに對して何等か適宜の取締方法なかるべからず、營業者それ自由の營業上に強ひて特殊の取締を行ふは、その營業方針を害すると共に其外客を不便ならしめ且また侮辱するに似たれど、奈何せむ、あまり放任の結果は猫の鼻頭に鰹節を置いて遠くより監視するが如し、

實例の一として、ある夫人に隨ひ行きし十五歳の少婢、たゞひ自己の給金を生涯に積んでさへ辿ゝ購ひ得られざる高價の品を、眼前その夫人が手に餘るほど多く容易く買ひ求めしに眩惑羨望の極、思はず我を忘れてメリンスの半襟を盗み、直に捕へらるゝや否、わッと大聲あ

けて泣き叫びしが如き、固より罪は罪なれど、いかゝ窘らしきぞ、殆ど一時の知覺を失うて罪を犯せしもの、また哀れならずや、

若き女の萬引に相對して青年の學生に一時また世人の耳目を聳動せしめしバクリなるもの あり、多くは書籍店頭の繁榮に乘じ或は勸工場の雜沓に出入して、加之も其盜品の最も高價なるを相互に誇れりといふ、かの有名なる横濱豪商の一子が羽織の紐を竊みて當時の問題となりしが如き、その他いづれも彼等また相當の家庭に育ち相當の教育をうけしものなり、或女學生の萬引を警察署に擧げし時、泣いて白狀するところは、不幸にして捕へられしのみと、同級の生徒中より幸ひ捕へられざりし犯罪者の姓名と盜品とを悉く列擧せり、恐るべし今日女學生の萬引なるもの、青年男生のバクリに等しき傾向ありて、殆ど其朋友間に於ける絶對的の祕密ならざるを、

既に罪を犯せしもの、法律上に於て認められたる減刑酌量と執行猶豫以外、さらに他より一點の容喙すべき餘地なしと雖も、銀行その他の會社員に近年の頻々たる横領罪さへ、一見その收入の少額と風俗の華奢と相叶はざるハイカラの流行兒をして、最も犯罪の容易なるべき直接自由の金錢上に當らしむるがため、會社の規定に對し重役の監督に對して四方攻擊の今日、殆ど一種の病的蔓延に等しき男女學生の特殊罪に對し、たゞ犯すを待ッて捕ふるが如きは聊か酷なり、寧ろ社會の裏面を横斷せる險惡の一大暗流として、これが適切の治水方法なかるべからず、

學校に於て教育の任にあるもの、家庭に於て父兄たるもの、さらに一層の監督を嚴にし注意を怠るべからざるは、無論いふまでもなし、

加之も女子の犯罪なるものを、爭ふべからざる事實上の統計表に見れば、悉く皆これ月經時

たるは、前の男女論に於て詳説せるが如し、
その月經に會せる父兄は固より、本人さらに自己の恐るべき危險時期に顧みて、最も警戒せざるべからず、

衣食住

衣食住は人間の何を偖置いても第一に研究すべき先決問題なり、先決問題たるこ共に人間また最後の解決問題これに歸せざるべからず、
頻に物質上の問題を賤しむものあれど、ある貴き無形物に對して賤しむは可なり、たゞ賤しきがために人間この衣食住に一日も離るべからず、

豆を嚙りて古今の英雄を論じ虱を捻りて當世の務を談ぜし時代は既に過ぎ去れり、紙は破れて風は窓に簫を吹き軒は破れて月は枕に影を照らせし時代また既に過ぎ去れり、四方の志あり て四十いまだ家をなさざる蓬蓽弊衣の國士的も、極めて稀なる或場合こ或人物以外、もはや今日の社會これを容るゝの餘地なし、
已むを得ざる勢ひこ、餘儀なき事こは、机上の空論に於て寧ろ痛快の擊退法あれど、奈何せむ、實際に於ては到底これを避くべからず、いやでも面倒でも今日の人間それ相應の衣食住なくして世に立たるべきや、
昔は衣こ住こを度外視して加之も食に重きを置かず、唯うろ〳〵こ世の中に生きて居た放浪者ありて、その放浪者に一種風流氣の讃辭を呈せし時代もありしが、雲助の系統に屬せる立ン坊こ雖も今日は裸體で通れず神社佛閣の軒下に寢られず、木賃宿に手足を伸ばして兎も角

も其日の腹を肥せり、

立ン坊に向うて満足の衣食住なしと笑ふべからず、尻切れ半纏の縄帯も彼がためには不足なき衣服なり、木賃宿の片隅も彼がためには相當の住居なり、ぶッかけの馬肉飯も彼がためには満足の美味なり、加之も彼等は日々正直に働いて其日の代價を滞りなく拂へり、衣食住は自己の境涯と身分とに應じたる程度を以て衣食住の必要とす、寧ろ彼等を笑ふものに境涯と身分の不相應なるがため、家賃を踏み倒し米糧を借り倒し呉服室を蹴倒して自己の衣食住を満足に出來ざる奴多し、ごの面さげて立ン坊を笑ふべき、立ン坊に笑はれざるは僥倖なり、一例として今この立ン坊より割り出せば、人間そも〳〵身分に應じて衣食住に窮すべき筈なし、

今日の衣食住に窮するもの、多くは衣食住の不相應なるがためなり、もしくは衣食住いづれか其一に偏して全體の權衡を失へるがためなり、

もし強き意味より論ずれば、一時の寄留籍にあらざるかぎり、乃至また其日の生活に迫はれざるかぎり、いやしくも一家の主人として妻子眷族を養ふもの、借屋は既に住居の本意に缺けたり、貧富大小、おの〳〵分相應に雨露を凌ぎ風塵を避けて安眠すべき家屋は自己の所有たらざるべからず、自己の身分に應ぜざる宏壯の家屋庭園は寧ろ人生の意味を破りて虚世の道に反すれど、自己の身分に應ぜし必要の家屋を所有するが如きは、眼を剝いて力むほどの業にあらず、僅の注意と多少の努力とによりて容易に得らるべき筈を、たゞ月々の家賃に滞らざるを以て住居の誇りとするが如き今日の人情は、あまりに意志の薄弱と處世の無能力とを露骨に表白し過ぎたり、

時に應ずれば他人の家に同居するも其境遇の満足にして、いはゆる二階借に一升買の土鍋飯

も其境遇の滿足なれど、身分に過ぎたる高價の家賃を拂うて借屋住居の門戸を張るもの、實は愚の極なり、これを俗に玄關貧乏といふ、玄關の立派なるがため絶えず臺所のガタツク所以なり、

但し門戸と玄關それ直に一種の商標として餘儀なき必要の營業者は別なり、譬へば醫者と辯護士の類、これさへ開業幾年の後は當然その手腕より自己の家屋を產み出ださざるべからず、

また金力に餘ありて殊更ら借屋住居するもの、これは妻子に對する家庭の快樂よりも他人に對する金利を大切と心得たるものなり、また身分相應の我家屋を叩き賣りて殊更ら宏壯の借屋住居するもの、もし家族の增加その他の必要に迫られ有用に供せざれば、やはり身分相應を忘れて住居の本意に反けり、

住居の本意は我所有物たるべきも、勢ひ已むを得ず其所有を得ざるものは、他を顧みるの要なく、直に家賃を以て住居の本意とせざるべからず、されど世間の事實この本意に反けるもの、また頗る多し、否、寧ろ都下全體に借屋住居の所有家屋に對して九割以上の多數を占むる所以はこれがためなり、

いはゆる家賃倒れと稱して、つまり家賃に追ひ倒さるゝもの多く、甚だしきは家賃のために、生涯の年期奉公せるものあり、月々その生活の重なる部分を割いて家賃に引き去られ、承知で引き去られながらも憤懣に堪へず、喧嘩といへば必ず家主を相手とするもの尠からず、これ等は十中の八九、長屋住居の勞働者か、もしくは居職人と稱する部類に屬すれど、それ以上の借屋に住むもの、さらに以上の門戸を構へたる借屋に住むもの、いづれも境遇の程度に過ぎたる家賃を支拂ふがため、ます〳〵生活難に肉薄吶喊せらる、

元來この家賃は家賃のみに止まるべき單純の意味にあらず、家賃は總ての生活狀態を左右し得べき根本問題にして家賃に苦しむもの生活の全體に苦しまざるを得ず、

土地の代價こ納稅の增加こに年々その家賃は爭うて騰貴すれぞ、社會の競爭こ人間の剩餘こは年々その收入を次第に減少し、加之も年々その人は自己の程度に逆行して身分不相應の家を借るもの多し、數に於て理に於て勢ひ窮せざるを得ず、つまり內容の實質を缺いて外觀の體面を飾らむこする生活狀態の虛榮心なり、

既に自己の家屋を所有せずして他人の家を借れるもの、わざ〳〵何を苦しみ何を恥ぢて殊更ら何のため家賃の高きに居るや、其地こ其家こに限られたる營業の商人、もしくは借金の多きを誇りこして借金の多きに手腕を示し事業を企つるものは、なるべく借屋の大なるを選び家賃の高きを拂ふべき必要の場合あるべきも、月々一定の收入によりて日々の小遣帳に眉を

顰むるものにして、自己の境遇に過ぎたる家賃を拂ふが如きは、入らざる世間體を憚るこ共に直接の利害たるべき自己の生活にも眞實を缺けるもの、高利貸の利息に追はるゝこ一般の愚なり、

社會の大勢に反抗するの力いまだ備はらざる以上、迚も叶ひ難き痩我慢を泣きながら無理に押通すよりは、沙漠に水草を追ふが如く、淡泊に快濶に適宜に便利に、さツさこ未練氣なく自己の分相應に轉々すべし、轉々して猶かつ一戸の家賃に堪へざれば、親戚朋友知己もしくは他人の家に笑うて同居すべし、同居また堪へざれば暫く洒落に二階借の貧乏世帶を張るの勇氣あるべし、ごう〻借屋住居の生活に突き落さるゝまで屁を曝して死守するの必要あらむや、退却は更に進擊の基なり、其間に努力奮鬪して捲土重來の勢ひを養ふもの、いかなる場合も時に應じ事に處して生活難を來すの憂なし、つまり今日の人間は力瘤の入れごころを間

違へるがために多く苦しめり、

譬へば三十圓の收入を以て一家五口を養ふもの、その三分の一に當れる十圓の家賃み拂うて、加之も敵に强奪せらるゝが如く不平面こに泣き面こに日を送るものあり、其いふところを聞けば、體面を保つがために餘儀なしこいふ、わづか三十圓を以て妻子五人を養はむこすれば、恥にあらず外聞にあらず、當然の數理上九尺二間の裏店にて足れり、やう〳〵三室か四室の借屋住居が誰に向うて何の體面を保つべきぞ、彼等の常に餘儀なしこいふ餘儀なきは已むを得ざる事實の餘儀なきにあらず、多くは自ら强ひて招ぐの餘儀なきなり、味噌醤油の代も拂はず天ぷらの金時計をぶら下げて、十圓の家賃ぐらゐに餘儀なくさるゝ奴、その他の人事一切いづこに餘儀あるべきや、

衣食の道また然り、

衣服は唯これ寒暑を凌ぐのみに止まらず、寒暑を凌ぐべき以上の理由こ必要あれども、その理由に適する力なく其必要に應ずる力なくんば、暫く寒暑に堪ふるを以て現在の程度こすべく現在の境遇に見苦しからざるを以て際限こすべし、

されご寒暑に堪ふるを以て程度こすべきものが、寒暑以上の贅澤を恣にせむこし、また見苦しからざるを以て際限こすべきものが、見苦しからざる以上の華奢を逞しうせむこするがため、人間の衣服にあらずして衣服の人間たるに至る、さらに甚だしきは、衣服の飾り物たる人間にさへなり得るもの尠く、あはれや衣服の捕虜こなり囚徒こなる奴多し、

つまり債權者は自己以外の金錢上にあらずして、自己の身を纏へる衣服これ債權者なり、人間こゝに至りては衣服のため差押へられたる物件なり、

執達更いかに酷なるも生きた人間を差押へず、差押ふべきもの財産中まづ身邊の諸道具こ第

一は衣服に著手すべきを、生きて歩きながら自己の身に纏うた衣服のために人間が差押への物件たること、天下これほどの不可思議あるべきや、されど今日の世間この不可思議物の多きを奈何せむ、

春秋の物見遊山、夏冬の避暑避寒、都下郊外の群集雜沓、ぞろ〳〵と用もないに身分不相應の綺羅を著飾りて浮かれ歩く奴、その多くは憫れむべし皆これ人間の精力を衣服のために奪はれたる男女なり、わけて今日の女流は殆ど衣服を以て生命とするものなり、寧ろ身分不相應にあらざれば衣服の價値なしと思へり、

この女子に對する男子の最も哀れなるは、自己の身分不相應に著飾る以上、また相手の女子に猶更の身分不相應を呈して、常に絶えず二人前の身分不相應を負擔せざれば、戀愛の成立も夫婦の圓滿も覊束なき世の中となれり、

實例の一として當世流行のハイカラ夫婦相伴うて歩むを見よ、その若きものは猶いまだ令嬢と令息の人目を忍ぶ戀路を辿るが如く、一見さらに夫婦たるべき容貌なく風采なく態度なし、また日曜の雜沓するところに妻の背後より子を抱き物を携へて隨ひ行く良人を見よ、妻は貴婦人の如く著飾りて家令を召連れたるが如く、良人は妻を自慢に著飾らせて腫物に觸るが如く加之も此夫婦の身分を洗へば何ぞ圖らむ、いはゆる腰辨の小官吏に多く、やう〳〵月に十圓か二十圓までの家賃を拂ふ會社員に多し、寧ろ其大膽と其遣繰とに驚かざるを得ず、されど窮せざるを得ざる理由は顯然たり、これで窮せざれば自己の力にあらず、父兄の財産にして今は窮せざるも後には必ず窮すべし、

但し人間それ相當の衣服に窮するもの、固より人間の恥辱とすべし、また身分不相應の衣服を纏うて窮するもの、全然これは馬鹿なり、出來ざる時は寒暑を凌ぐに足るを以て常とする

もの、その以下たるこ以上たるこに拘はらず、適宜を知り應用を知りて窮せざるべし、

食は衣こ住よりも更に缺くべからざる人間生活の最大急務なり、元來その必要を論ずれば、食住衣たるべき筈を、語調の上より衣食住こいふ、

食は單に人の生を保つのみならず、生を保つ以上に美味の快樂あり、さらに比較上その滋養分の多少こ優劣あり、

人間の身體は水分こ灰分こ蛋白質こ脂肪質このこの要求を以て養はれ、一日二十四時間こして澱粉質が四百八十瓦、蛋白質が百瓦、脂肪分が二十瓦こいふが如き、醫學上より來れる專門家の分析表は玆に要なし、たゞ綜合統一的の約言に食物こいふのみ、米でも麥でもよし、獸肉魚肉野菜、いづれも口に合ひ分に應じて御勝手次第なり、

されこ御勝手に出來るもの以外、これほこ御勝手次第にならぬものなし、

住むに困り著るに困るこいふよりも、人間貧窮の代名詞は唯これ食ふに困るこいふ、乞ふバンを與へよの一語は、總ての高尚なる學說も理論も打破するに足るの力あり、事實また食ふに困らざるもの、さのみ衣こ住こに困らざる筈なり、

美味は多く滋養分を含み、滋養物は多く美味を含みて、幸ひ一舉兩得なり、これを常食に取り得るもの取り得べきも、已むを得ざる生活狀態これを取り得ざるものは、何こすべき、問題の割合にその解決は頗る簡單にして容易なり、唯これ働いて食へるものを食ふのみ、

いかに美味たりこも、いかに滋養物たりこも、寢て居て食へば寧ろ身に害ありて口に適せず、たこひ麥飯なりこも乾魚なりこも、多く働いて多く食へば、寢て居て食ふ奴の美味こ滋養に勝る、

天の人に食を與ふる所以、ありがたき御方便至極こいふべし、また人こ食この關係は衣こ住

よりも更に大なる急務にして人は生きざるべからず食は取らざるべからざる理と理の融通法に於て、いかに密接簡易の便利なるかを知るべし、さるを世の中に食へぬといふ奴は食へぬにあらず食はぬ奴なり、加之も働かずに美味い物を食ひたいと吐す奴は人間の出來損ひなり、

つまり美味と滋養とは食物の詮議よりも食物を消化すべき人間の詮議にあり、いち〳〵衛生家の注文に應じて食を撰ぶもの、必ず元氣達者の壯健者にあらず、實は恐れて衛生家の注文通りに行はざるを得ざる時、これ既に病人なり、宜しく醫者のいふ事を聞くべし、

身に病なきもの、人間の食ふべきものに消化して滋養たらざるものあるべきや、消化の善いも悪いも食物にあらず其人にあり、たとひ不消化物たりとも、どし〳〵大に食うて滋養分とするほどの活動せざるべからず、寢て居て食へる奴、なほさら跳ね起きて大に運動すべし、

以上こゝに約言すれば、人の最も難しとする衣食住は寧ろ却ッて人の最も易きものなり、これを難しとするものは自己みづから殊更に難事とするがためなり、これを易しとするもの、その易きところを行ふに何の難き事やあるべき、

當然、これを免るべからざる衣食住に苦しみて、その生涯を悲泣と煩悶と沈鬱と憂慮とに送るものは、いはゆる自業自得の愚物なり、

心氣一轉せよ、衣食住は決して人間の苦痛にあらず、人間は衣食住以外の或目的に向うて苦心慘憺せざるべからざるなり、

夫婦

理論上、夫婦は男女相思の戀愛より出でゝ加之も其戀愛の結果を滿足に得たるもの、これ卽ち夫婦たるべき筈なれど、事實上、戀愛は必ずしも夫婦の目的を達すべき完全の基礎にあらず順序にもあらざるのみか、寧ろ世間の所謂る戀愛なるものは、却ッて他日の夫婦たるべき順序を阻害し目的を破壞すること多し、そもゝ戀愛の罪か人間の罪か、將また夫婦は戀ゝ人ゝの力に及ばざる自然の約束に結ばるゝものか、

妻は良人に對し良人は妻に對して其間の情愛に一點の遺憾なき圓滿の夫婦も、その圓滿なる

情愛は十中の八九、多くは夫婦となりし後の情愛にして、もし正直に露骨に大膽に無遠慮に未だ夫婦たらざる以前の意中を飾らず僞らず忌憚なく恐怖なく告白せしむれば、この道に於て人は最も祕密の器なり、今更お互に相濟まぬ事ながら實は内々そゝ青年男女の昔、殘紅紫影、誰か現在の夫婦以外に多少の思ひ出なかるべき、凡そ天下の夫婦なるもの、決して悉く最初より一貫せる戀愛相思の結果にあらず、思ひ思はれし戀を首尾よく遂げしものは案外に尠くおもはぬ、緣に繫がれて連添ふ人の意外に多し、

この點より見れば、戀愛と夫婦とは殆ど別なり、たゞ道理と希望とに於て飽まで別ならざらむとするも、事實と結果に於て餘儀なく別ならざるを得ざる場合の多きを奈何せむ、

事は志と違ひ、人生さらに意の如くなもざるもの、わけて男女の間に多し、

加之も戀は人目を忍ぶに思ひを增し涙の露を宿として、意の如くならざる情緒纒綿と波瀾曲折の多きに戀の分量いよ〳〵加はり戀の程度ます〳〵深しとすれば、多情多恨の一語、いかにも能く此間の眞相を穿てるに反して、すら〳〵と互に何の苦もなく其まゝ無事に目出たく添ひ遂ぐべき夫婦の間には、春風春水、秋の哀れに似たる憾もなく悲みもなく、つまり戀の用なし、もしありとすれば、うれしき寐覺に指折り數へて其日の來るを待ちこがるゝのみ、長き戀に苦みて多くは其甲斐なきと、短き戀を樂みて直に夫婦たると、苦樂長短、それ孰れぞや、

戀は隱れて擁し泣いて語るに趣ありとするものは、戀愛の目的を神聖に願はざる野合癡情の徒、戀を弄ぶ奴なり、

たゞひ互に僞らざる心と心に堅く契りし眞實の戀も、あはれ無慙なる世間の實例は、その戀や夫婦の約束履行に直接の責任は薄くして動もすれば多く第三者の觀あり、夢さら〳〵さう

いふ筈でなくとも、眼前の現在、かういふ世の中にして、寧ろ見ず知らずの他人と他人とを嘘半分に取纏めし仲人口の夫婦は却ッて無事なり、

いはゆる自由結婚とは、何物にも支配されざる男女兩性の希望を自然の要求に滿たして、互の手と手を愛の神に導かれ愛の神に結ばるゝが如きもの、凡そ人生これ以上の快樂と幸福なく、この快樂と幸福は社會の進歩に伴ひ人間の向上に從うて、いづれ萬人一樣に與へらるべき時節到來すべきも、神の目より見たる今日、まだ早いと仰せられて或時期の來るまで、深く理想的の寶庫中に祕藏せられ、誰彼なしの手を出して直に得らるべきものにあらず、もし强ひて無理に取らむとすれば神聖なる戀愛の竊盜罪なり、此奴、不埒なりとて忽ち罰せらる、

時いまだ來らず人いまだ達せざる今日この自由結婚なるものに就て、わざ〳〵緻密なる解釋の必要なく高尚なる說明の必要なし、たゞ卑近なる世俗の一句、ちゝくり合の果を見よ、いたるところに戀愛の甘き香を追ひ廻る今日の青年男女、いかに口を開いて滔々たる議論を吐くも、汝等の戀を評するに自然の本能も神聖の希望もあるべきか、重ねて曰ふ、只これ一句ちゝくり合にて澤山なり、

まゝならぬ浮世とは戀に對する古今通有の歎聲なれど、一定の學資を給して一定の學校に入れ豫期の年限内に僅か一枚の卒業證書を得るさへ覺束なき今日の青年男女をして、この危き戀を放縱散漫なる心のまゝに振舞はせて堪るべきや、三歲兒に火の粉を弄ばすが如し、到底、今日の青年男女は戀の自由を神より許されて、互に淸き愛と愛との結晶體たるべき夫婦の資格なし、たとひ一時は多少の不足ありとも我慢せよ、實際また然のみ我の出來ざる事でもない以上、やはり舊思想の頑固なる阿爺に叱られ親親に說き伏せられて殆ど無理往生

に強ひられたる夫婦が分相應なり、加之も比較的、その後に間違なくして寧ろ家内安全なり、

不祥なる離婚の統計表は、爭ふべからざる事實の結果を捉へて明白に示せり、理に於て多かるべき筈の父兄に押付けられし夫婦は却ッて尠く、情に於て尠かるべき筈の戀路を辿りし夫婦に却ッて多し、

好いて好かれて數々の憂苦勞に添ひ遂げし夫婦は、さて夫婦となりし後　過ぎし逢ふ夜の戀を忍びしほどに面白からず、加之も互に遠慮なき我まゝこ我まゝの衝突上、動もすれば別れ易く離れ易し、

好きも好かれもせず自然の緣ありて夫婦となりしものは、その夫婦となりし時その情愛を生じて、加之も互に新なる快樂と快樂との結合上、その家庭は容易に破れ難く崩れ難し、

もし人に戀を免れずとすれば、或意味に於て戀は夫婦たるべきまでの産物なり、一面また夫婦となり得ざるところに寧ろ戀は宿れり、なほ春の蝶の花に狂へるが如し、既に夫婦を得たる以上、いづれの蝶か、いづれの花か、蝶は花に憩ひ花は蝶に任せて、おもむろに音なき春風その情を暖むべきのみ、

結局、夫婦なるものは男女の生涯を前後に分ちて、人間の情事一切を過去と將來に兩斷し、夫婦たらざる以前の總てを忘るゝと共に、夫婦となりし以後の總てを新にして百年の契を結ぶ、男女こゝに相擁して夫婦たるの一刹那は、その相擁せし男女二人の友白髮を契れるのみに止らず、誠心誠意、もはや世の中に向うて他の戀も愛も潔く忘れ果てし生涯の堅き立證たらざるべからず、もし夫婦以前の互に何等かの疚しき點あらば、あらためて妻は良人に對し良人は妻に對する悔悟の念と謝罪の意味とを含まざるべからず、

以上を約言すれば、戀愛を以て夫婦の基礎とするよりも夫婦たるの事實それ直に夫婦の基礎とすべく、たゞひ其間に多少の不足ありとも既に夫婦となれば必ず自然の情愛を生じて人道上この情愛に終生を滿足すべしといふにあり、

詮じ來れば男女こゝに夫婦たるの一事は、殆ど人間の化學作用に等しく、男女おの〳〵互に其身と其心を捧げ合うて別に一個の物體となるべき人生行路の一大變化なり、

男を夫と稱し女を婦と稱し、世間たゞ夫婦を以て男女兩性のものとすれど、神聖なる意味より解釋すれば、夫婦これ一字の稱にして二字の稱にあらず、

夫婦は男女合成の一個體にして、おの〳〵別種の二個に解釋すべからず終生また分離すべき筈のものにあらずと雖も、奈何せむ、あるべき事實は事實として往々これを別種の二個に解釋され分離さるゝ事あり、人生の悲慘と不祥これに過ぎず、

甚しきは、夫婦となりて幾年の後に起りし餘儀なき事情のためにあらずして、夫婦となるべき以前、もしくは夫婦となりし當時、既に分離の覺悟を極めて、いはゆる合せものは離れものと生涯一度の大禮を至極手輕に心得たる奴あり、

つまり一時の虛榮心に驅られて殆ど世間體のために夫婦となりしもの、さもなくば只これ互の獸慾を滿さむがために夫婦となりしもの、或は夫婦以外の目的を覘うて利慾のために夫婦となりしもの、或は其時その場の都合上より當分まづ試みに夫婦となりしもの、虛榮夫婦、情慾夫婦、利慾夫婦、都合上の夫婦、野合上の夫婦、出來合ひ夫婦、ごれ合ひ夫婦、かゝる徒輩の離合集散に常なきを以て、そも〳〵夫婦の定義上に何の關係なし、彼等は元來の心理的に缺陷ありて人間の夫婦たるべき理由を解せざるのみならず、あはれむべし、實は夫婦と

なりて其間に自然の情愛を生じ得ざる不幸の不具者なり、

もし夫婦として餘儀なく避け難き離婚の理由を見出だせば、夫婦いづれか一方を失うて到底その寡居を守り得ざる場合と、夫婦いづれか一方に堪へ難き子孫遺傳の惡性病を發せし場合と、夫婦ともに相別れざれば死するより外に道なき悲慘の場合と、良人は妻のため妻は良人のため再び世に立ち難き恥辱を蒙りし場合と、まづ凡そ以上の四件にありといふべし、されどかゝる場合さへ泣いて忍ぶものを尊ぶ、一點さらに他より別離を誘ふべき理由なし、まして近來の離婚を要求するに、性格の相反せるがためといふが如き、趣味の異なれるがためといふが如き、固より他人と他人と承知の上で夫婦になりながら、今更ら好きな事を吐して互に喧嘩の種とし、勝手な熱を吹き合うて雙方より別れ話を持ち上ぐ、いかなれば人情の輕薄こゝに至れる、言語道斷の沙汰なり、そも〳〵生涯の苦樂を俱にし或場合には死生も共にすべく誓うて夫婦たる以上、その間に性格の反せる理由も趣味の異なれる理由もあるべきが、おの〳〵性格と趣味とは夫婦たらざる以前の性格と趣味なり、その相反せる性格を自然の情愛に溶解し相異なれる趣味を朝夕の談笑に融和してこそ、こゝに始めて嬉しく娛しく打解けし夫婦の甲斐あるのみならず、さらに一家の圓滿なる新性格と新趣味とを生ずべき筈なり、

加之も夫婦の圓滿と幸福とを來すには、專門家の結論生理上の關係と心理上の作用より寧ろ同性同質を許さず、却ッて正反對に異性異質たらざるべからずとせり、氣が合はぬとて別れる奴等、實は互に何等か祕せし嘘の皮を剝ぎ合うて雙方お座の覺めた故なり、

その他あらゆる世間一般の離婚を穿鑿すれば、殆ど一も正當の理由と認むべきものなく、財産の有無に關し、地位の消長に伴ひ、境遇の利害に連れ、前後の得失に迷ひ、左右の禍福に

誘はれて、多くは物質慾望の轉化に屬し、さもなくば嫉妬偏執、猜忌狐疑、怨恨讒誣、輕跳浮華、虚榮驕奢、誤解邪推、專恣横暴、放縱散漫、多くは修養なく節制なく耐忍力なき意志薄弱の結果にして、最も夫婦たるの眞價を誇り光輝を放つべきこころに最も恥づべく厭ふべき我まゝの不足を持ち出し、その不足こ不足の衝突より起れるもの、そも〳〵夫婦こなりしが間違ひの始めにして、その分離すべきが當然の終りなり、

彼等は人事大切の夫婦を以て終生の夫婦こせず、心易き金錢の授受に等しく只これ一時の假契約こせり、殆ご營利的を主こせる合名會社の如くに思へり、汽車こ電車の乘合よりも聊か長きものこ思へり、往來の他人よりも多少は安心の出來るものこ思へり、夫婦戸籍面の出入は區役所の代書人に一枚三四錢を投じて自由自在の簡易輕便に行ひ得らるゝものこ知れる外さらに夫婦たるの意味を解せざる奴なり、

貧乏別離、嫉妬別離、喧嘩別離、不足別離、その他いづれも皆これ夫婦の分離にあらずして、實は分離すべき筈の男女が暫く夫婦の名目を冒せるもの、送籍入籍の手續は宿屋の帳面に旅客の名を記すが如し、たゞ時日の長短あるのみ、

夫婦なるものを以て單に子孫繁殖のためこするは、あまり社會を物質化して人間を器械視するの恐あれど、夫婦には必ず子孫なかるべからず、

子なきを去るこいふ女大學流の七去制は、男尊女卑の昔、良人の體質を穿鑿せずして只その罪を妻に蒙らせしもの、もはや今日の世の中に根底の薄弱なる理論なれど、夫婦なる唯一の條件こしては子孫繁昌に重きを置かざるべからず、子孫は夫婦たるべき人生の最大幸福なり、

家を嗣ぎ産を傳ふるに養子養女の自由ありとも、動物の愛は最も自己の血に近く自己の血を注ぎしものにあり、まして家と産のみは生命の誇りとならず存在の滿足を得ざる人間、子なきを以て不幸の極とすべし、他人の子を養ふは勢ひ已むを得ざるに出づ、

一家の不和と夫婦の離別は多く子なきに起る、

子の多きため夫婦その貧を凌ぐ能はずして相別るゝものなきにあらざれど、子なきために夫婦の相別るゝものは貧富を通じて更に頗る多し、

子は夫婦の鎖といへる俗語、貴賤ともに殆ど總ての家庭を支配して、その不平不滿を融和するに足る、

子は三界の首枷といへど、この首枷あるがため、その首を横に振らず眞直に働くもの多し、

この子がある故に苦勞するとは、この子あるがため、その苦勞に撓まず斃れず世を渡りて後を樂しむ、なほ淨瑠璃を聽いて泣きながら喜ぶが如し、

たゞ夫婦のみの快樂は其快樂以外に一家生活の責任ありて、寧ろ夫婦たらざる男女の責任なき戀の快樂に如かず、されど夫婦に子を加ふれば、始めて夫婦たらざる男女の戀よりも深き快樂あり、

夫婦こゝに子なきを以て夫婦の意味を有せず人間の最大不幸とすれば、男女おの〳〵夫婦たるべき以前、その美醜よりも、その貧富よりも、その貴賤よりも、まづ第一に生理上の觀念を忽にせず其選擇力を最も雙方の體質に注がざるべからず、あゝで種が惡いとか畑が惡いとかの喧嘩は何の功なし、

極端なる人種改良論者は、結婚を世界的に擴めて、地球上の血と肉とを融和混同せむとすれ

ご、或事情ご或少數を限れる以外、かゝる問題は人情風俗歴史習慣の異なれるのみならず、そも〳〵國家の存在ご兩立すべからざるごころあり、

されご我々同胞の間に於ては最も適切に體質改良の必要あり、既に動かすべからざる事實ごして、近親結婚の恐るべき害ありごすれば、一町一村の相知れる近き緣よりも一郡一國の相知らざる遠き緣を求むべく、交際の自由ご交通の自由なる今日、穴熊の如き舊思想の閉鎖主義を捨てゝ大に進化的の開放主義を取り、東西南北、四通八達、及ぶかぎり屆くかぎり山河遠隔の男女を結ぶべし。

禽獸魚介草木のみならず、人間また風土の產物なり、一見さらに同形同質を失はざるも、專門家の微細なる研究は、いづれの點にか必ず相異なれるごころありて、その異なれるごころを合して夫婦ごなすは、醫學上、心理上、その同じきごころを合するよりも、遙に優りし人間向上の定論ごなれり、

水鴨の家鴨を合せて、相鴨の美味を得るが如く、樹木は他より接木の上に菓實の美味を得べく、もし精悍の猪ご懶惰の豚を合せば必ず其間に面白き子を生むべく、犬ご猿、牛ご馬、ごれは全然お話にならざれご、人間また產地風土の異なりて遺傳血統の相遠き間に子孫の健全を得べし、

加之も親類緣者に抱擁せらるゝものは、事の緩急に應じて談合援助の便あるが如きも、その便あるがため寧ろ却ッて心を散じ易く我まゝを演じ易く、動もすれば夫婦間の愛情を薄らけ調和を缺くの恐あり、

すぐに駈け込んで泣くごころの手近にあるは、妻ごして良人を大事にせざる基ごなり、すぐに捻ぢ込んで不平を洩らすごころの手近にあるは、良人ごして妻を大切にせざる基ごなり、

雙方いづれより見るも害ありて利なく、その親類緣者が嚴格なる夫婦の監督者となり訓戒者となり制裁者となるものは尠く、世間の實例は親類緣者の間より離緣沙汰を持出すもの多し、もし新婚旅行を以て結婚の形式以外に相當の理由ありとすれば、その後に於ける夫婦また子に甘き親里と苦情を訴へ易き親類の近きよりは遠き他國の空に相伴うて一入の愛憐を增すべく、たとひ夫婦ならざるも慰藉の念は寂寞の境に生ず、まして離るべからざる夫婦お互に四方を顧みて倚る邊なき身の交情いかに深きぞ、

たゞ一時の新婚旅行に止らず、職業と境遇とに差支なき以上、なるべく父兄の下より遠く手放すべし、もし手放し難き事情あらば、なるべく住居を隔つべし、これを離して安心の出來ざるものは、朝夕の膝下に置いても不安心なり、最初より夫婦とすべからず、夫婦いづれの天地に行くも夫婦なるべし、

水の窪きに流れ落つるが如く、四方より人間を吸集せる都會はこの點に於て最も便利と幸福とを得たり、わざ〳〵山を越え河を渉りて遠き鄰村鄰郡、もしくは他國に緣を結ばずとも、居ながら其族籍を取調べて東西南北の生產地を撰ぶに足るのみならず、わざ〳〵これがため職を求め業を需めて他に出づるの必要なく、また父兄親類と分離の居所を轉ずるにも頗る自由に簡易なり、

以上を約言すれば、人間の有形無形に於ける進化發育の利益上、男女おの〳〵遠く相隔りて生れしものを結ぶべく、既に結びて夫婦たる以上、寧ろ親類緣者の近きにあるべからずこいふにあり、

筒非筒、ふりわけ髮の幼馴染、いはゆる一家の內に育ちし許嫁の夫婦に却ッて終牛の圓滿なるもの尠きは、强ち互の心易立より遠慮なき癡話喧嘩の果にあらず、有害なる近親結婚を事

實に示せる一端なり、

夫婦の美とは何ぞや、美男と美女との夫婦たる意味にあらずして、夫婦これ一體の觀察上、いはゆる配合の美なり、いはゆる綜合の美なり、

男子は男子らしく活氣充滿の威容堂々たるべし、女子は女子らしく貞淑溫雅の進退楚々たるべし、これを配合し綜合して夫婦の美といふ、

男の女らしきと女の男らしきは、既に美を失ひ性を破り質を過りて世の中の出ごころを間違うたる生れ損ひなり、

三月の雛壇を見るが如く、色白の優男と色白の優女と相竝びて夫婦たるは、殿樣流を尊びし太平無事の昔に適せる似合の夫婦なれど、生存競爭の激烈なる今日の社會、これを一對の夫婦としては配合の美にあらず、寧ろ男は五月人形の荒武者的にして女のみ三月の雛めいたる夫婦を綜合の美とすべし、

醜男の美人を妻として其間に水も漏らさぬ愛情の滿てるは、いかにも良人の器量を上げて良人いよ〳〵立派に男らしく、いかにも妻の貞操を表はして其妻いよ〳〵女らしく、奥床しく、家風家庭の内容を羨望の極、人を惱殺するに足れど、吹けば飛ぶやうなる弱々しき美男と美女との手を引き合ひし夫婦は、いかにも輕々しく却ッて見苦しく、實際また異性同居の夫婦たるべき眞意を失へり、

怒れる肩より差出だして太く黑き手と、地藏肩より伸べて細く白き手と、色彩の際立てる硬軟剛柔さらに相携へてこそ、始めて男女兩性の美を發揮せり、病人の如き手と手を結び合うて夕暮の薄闇を歩めば、幽靈の道行に等し、

寧ろ男子の美にして女子の醜なるは、良人その妻を容貌以外に愛し妻その良人を誠意誠實の感謝的に慕うて、春畫草紙の戯れに似たる雙美若輩の夫婦よりは遙に配合の美を得たり、巖の如き男性美、花の如き女性美、おの〳〵その美を異にし、その異なれるこころを合せて夫婦の美を保つべし、

早婚の弊、晩婚の弊、いづれも弊は弊なり、たとひ多少の希望を犧牲に供するとも人道の約束として、男女ともに相當の時機を逸るべからず、

社會の競爭、人口の繁殖、求職の困難、生活の迫害、教育年限の增加、選擇範圍の廣大、これがため幸ひ今日の男女は早婚の弊を免るべきも、また一面これがため晩婚の弊に陷らざるべからず、

されど晩婚の弊は餘儀なき事情あると共に、家庭の不幸を來し子孫の虛弱を來すべき早婚の弊よりも寧ろ害は尠し、

體育上、智育上、自營上、社會に對する總ての能力上、男女の間に凡そ十年を隔てゝ男子まづ三十歳前後を適當とし、女子は苟も二十歳を超えざるべからず、普通一般の常識判斷より見れば、良人たるべき男は三十歳を以て世に立つべく、妻たるべき女は二十歳以上を以て家を守るべく、加之も其間に十年の間隔を置くは男女同衾の生理的に最も至大の關係ありて、殆ど同年の夫婦よりは寧ろ老夫少妻の勝れるに如かず、

されど近來の世間往々、さのみ珍らしからざる事實として、餘命幾何もなき六七十の禿頭が十八九の白粉臭き細君を持てるは、あまりに權衡を失ひ過ぎし不自然の夫婦にして、良人は妻を一種の玩弄物とし妻は良人を虛榮の財源に備へ、老いて盛々壯なる老爺の精力旺盛を驚

くと共に、物質慾望のため自己を粗末に取扱ふ若き女の多きを驚くべし、

男女同權の論は猶いまだ暫く理想的として、現在の事實は夫婦間の勢力、いづれに多きや、東洋の我國に於ける財産は、悉く良人の所有に屬し、妻の所有に屬せるは殆ど例外として、或特殊の場合に限れり。

妻は良人の財産に養はる、財産なきものは其生活力に養はる、良人として妻の財産、若くは其生活力に養はるゝもの、良人たるの資格なし、世間これを男妾といふ、

さらに社會あらゆる方面の活動と職業とは、多く男子の責任にして、近來は次第に女子の獨立自營を增加せるも、人の妻として別に自立の職を有せるもの、極めて尠し、

俗に共稼ぎと稱する一種の階級あれど、その共稼ぎは同權同力の意味より來れるにあらず、夫婦ともに稼がざれば共倒れとなるべき境遇の已むを得ざればなり、これさへ良人の勞力と賃錢は妻の得るところと比較すべからず、

いづれの點より見るも、妻は良人の力に扶けられ妻は良人の力に養はる、その良人の扶養に酬ゆべきものは、只これ家庭の母たるのみ、良人の爲し得ざるものは姙娠分娩哺乳の任あるのみ、加之も子の母たるは良人の門外に奮鬪するが如き苦痛にあらずして、寧ろ快樂と共に幸福をうくべき女子の誇りなり、別に家を守り良人を慰むるもの妻にありといへど、その家は良人のためのみにあらずして妻また良人に慰めらる、夫婦の愛情を同じ分量に保つべきは人道上の正當なれど、夫婦の權力を五分五分に行はむとすゝは輕重を過れるのみならず、動もすれば社會の組織を毀損するの恐あり、

男尊女卑は固より德義の罪惡なれど、國政と國防の任を帶びて生活自營の職を擔へる男子に

對しては、女子たるもの聊か常に遠慮して其御苦勞を謝せざるべからず、私こいふ女房あればこそ一所懸命に亭主の働くものゝ心得たるは、あまりに嗚ァ天下を振廻して、ミンでもない不量見の至極なり、

いかに解釋するも、いかに說明するも、事實の立證せる社會人類の現象として、良人は與へ妻は與へられ、良人は施し妻は施され、良人は授け妻は受け、良人は扶け妻は扶けられ、良人は養ひ妻は養はれ、良人は率ゐ、妻は率ゐられ、良人は愛し妻は愛せられ、良人は憐れみ妻は憐れまる、その他あらゆる人事一切の上よりも主客の天分は既に定れり、

妻の良人に從ひ良人の妻に主たるは、殊更に優劣を爭ひし男女勝敗の數にあらず、かくあるべき自然の道理にして、かくあらざるべからざる社會の組織なり、

もしこれに不服を唱へて、無理往生に男より押へられたる恥辱とするものあれば、御勝手次第、生涯を獨身生活に送るの外なく、妻として良人を持つべき資格は無論なし、良人に對する妻としての資格なきのみか、たゞの女としても取扱ひの出來ざる不具者なり、

されど斯る不具者その實は却ッて生理的の情慾に堪へず、幸ひ男子中にも妻を持つべき良人の資格なき選り屑あり、これを男妾に供すれば、こゝに始めて雙方の滿足を得べし、

親子

親は子に對して慈愛を施し、子は親に對して孝養を捧ぐ、敎へられずとも人間これが自然の情なり、わざ〳〵念を入れて催促せらるべき筈のものにあらず、固より當然の事なれど、奈何せむ、人は當然の事に最も不當然の行爲多し、

親の慈愛は親の自慢にならず、子の孝養は子の自慢にならず、されど親その子に對する慈愛を以て他人に施すが如く特殊の有難味を誇らむとし、子また親に對する孝養を以て寄附金に應ずるが如く恵與的に感ぜしめむとするものあり、喧嘩すべからざる親子喧嘩こゝに起る、

親の慈愛と子の孝養とは利益主義の交換物にあらず、親その慈愛を認めずして慈愛を施し、子その孝養を認めずして孝養を盡すもの、始めて親子自然の情ありといふべし、

この恩知らず奴と吐鳴り散らす親は案外その慈愛薄く、これほどの孝行が分らぬかといふ子に孝養の厚きものなし、

慈愛の念に浮き親は、その子に强制的の孝養を迫らず、孝養の念に深き子は、その親に慈愛の深淺を問はず、慈愛孝養ともに强ひて要求の性を帶びざるものなり、

もし要求すべきものとすれば、社會の組織上と道德上これを他より要求し奬勵し教訓し時に或は鞭撻し懲戒すべきのみ、

もし近來の事々物々を判斷すべき權利義務より論ずれば、親その子に對して養育と教育の義務あると共に疾病老衰の扶助を命ずべき權利あり、子その親に對して養育と教育をうくべき權利あると共に疾病老衰を扶助すべき義務あり、されど權利義務また社會より見たる權利義務なり、親子その間に爭ふべき權利義務にあらず、自然の情に於ては親その義務を盡さゞるも子その權利に服すべく、親の任を果さゞるがため子の任を果すに足らずといふの理由なし、人その生れし鄕國を忘れざるかぎりは子として自己を生みし親を忘るゝ筈なし、

加之も孝子の實例は多く滿足の養育と教育をうけざるものに出づ、寧ろ贅澤なる養育と過分の教育を施せし親の下より孝子の出づること稀なり、强ち貧賤なるがために孝子の現はれ易く富貴なるがため孝子の現はれ難き所以にあらず、子としては貧富貴賤いづれのところにも

孝を盡すべき道あり、たゞ親の境遇と地位とによりて其子の孝道に別あるのみ、勞働者の孝は華族に用なく、華族の孝は勞働者に用なきが如し、

さらに社會の發展と人間の進歩に從うて、孝の性質は古今に變ぜざるも孝の解釋は時勢に伴はざるべからず、いはゆる支那の傳說に二十四孝の如きは、良人のために妻の身を賣りし我國の舊劇と等しく、たま〳〵これあらば情に於て憐れむべき點あれど、世間一般これを學べば理に於て喜ぶべき現象にあらず、事實また却ッて寧ろ孝道を破るの恐あり、

昔は孝を論ずるに特殊の場合と特殊の人間に限られし感情の極度を以て世間普通の上に及ぼさむとせしがため、動もすれば强ひて不可能的の行爲を要求せしが、今日は何人も世間普通の實際上に行ひ得べきところを以て人情の自然に訴ふるがため、孝を盡すの道また昔日の如き至難なくして常に容易なり、

されど人間の相場崩れと共に孝行の價値が下落せしにあらず、孝行そのものが時代の當然に伴うても、はや雪中に筍を欲しいと無理いふ親なく、もしあれば自由自在に鑵詰を供すべし、これに不服を叫べば親に罪あり、但し子は一飯の食を減ずるとも其鑵詰を求めざるべからず、

親は子に對して生殺與奪の權なしと雖も、親は子を生めり、或意味と或程度に於て子たる我は全然これ親の所有物なり、我また子を生んで後の親たるべし、わざ〳〵賴みもせぬ我を勝手に生んでくれたといふ奴、そも〳〵不幸の絕頂にして、子たるもの、いかなる場合、いかなる親を持つも、終生その親に感謝せざるべからず、

もし感謝するに及ばずと制するものありとも、親に對する子の情として必ず感謝するものとすれば、その感謝に伴ふべき孝道は他より敎へられず勸められずとも自然に出來る筈のもの

なり、これが出來る奴、人として世の中に何が出來るべきや、

社會上、法律上、親權なるものを制限せられたる今日、これに對する孝行は決して無理なる注文にあらず、その子に向うて殊更に孝行を督促するは、寧ろ侮辱を加ふる所以なり、この侮辱を他より加へられて猶かつ自己を生みし親に不幸なる奴、もはや道德の範圍内を以て處すべからず、その心理作用を疑うて精神異狀の解剖的に附すべし、

血を流し肉を殺ぎ骨を削るに足らざる今日の孝行は、擧むべき事にあらずして、子の親に對する尋常一般の當然なり、これを稱揚せるは不幸の對照のみ、もし世間に不孝なるものなくむば殊更に孝の文字を存在すべき必要なし、つまり自己の境遇と身分に應じて親に心配なく安心を與ふれば足れり、心配と安心は親の程度問題なれど、親の程度には子に甘き慈愛より頗る買被りて割引せられたる筈にして、その親にさへ心配なく安心を與へ得ざる奴、買被らず割引せざる世の中に出でゝ自己まづ心配なく安心の出來る筈なし、

結局、親に當然の孝行をなし得ざるもの社會に滿足の歩行なり難し、

親を殺すものゝ子を殺すものは例外なれど、世に不孝の子あるゝ共に世間また無慈悲の親あるは免るべからず、

社會は人間の共同體にして人間は社會の生産物なり、社會これを懲罰し制裁すべき權能ある以上、社會これを養育し教育すべき責任あり、親は唯これ人類繁殖の用に供せられて生めるのみ、一切その子に對する直接の權利を拋棄すると共に何等の義務も負ふべき筈なし、現に行はるゝ公設の幼稚園と諸學校とは、竟に來るべき此理想の一端を示せる萠芽なりと、かゝる極端の危險思想は人間に血も肉もなくして生存し得らるゝ時、或は始めて實行せらるべ

し、

幸ひ今日いまだ人間の血と肉とを失はざれど、既に其血と其肉の暖を失うて我子を見ることの如き親あり、

殆ど他人の如き親あり、

子を生むの一事は人間に限らざるも、只その生める一事を以て子に對せる慈愛の萬能を盡せるものと心得たる親あり、

我子の養育と教育を以て我財産を偸まれ我勞力を奪はるゝが如く、これを惜みて加之も其子いまだ事の成らざるに過分の辨償を得むとし、殆ど高利貸の强制執行に等しき親あり、

我子の幸福を願はず寧ろ我子の不幸を犧牲として、猶その犧牲物に絶えず不足を唱ふる親あり、その犧牲物を一滴の涙なく自己の酒色に供する親あり、

冷遇虐待、無情殘忍、この他いづれも親として慈愛なきものは、その子の死せざるかぎり我ために盡さざる一種の食料品とするもの、親に對する不孝の心理狀態を疑へば、子に對する無慈悲の心理狀態も疑はざるべからず、

人間の原則として親に必ず子を養育すべき任あり、教育は親の境遇によりて能はざる事情あり、これさへ親は子のために奮鬪して力の及ぶかぎりを與へざるべからず、加之も其養育と其教育とを以て希有の珍品を得べき代價の支拂とせず、たゞ親の慈愛より溢れ出でし自然の産物を待つべきのみ、その産物の如何は親の要求にあらずして子の提供にあるべし、

まして衣食に餘力あるものは、社會競爭の保護者として、みだりに我ための孝を急ぎ孝を促すべからず、成功は我に對する孝道の第一として、只その子の成功を祈るべきのみ、

願はくは今日の親たるもの、貧苦、老衰、疾病、その他の避け難き不幸に遭遇せざるかぎり

はなるべく、我子の孝養に衣食を求めずして、別に自己の職を有するか、若くは自己の財を有すべし、

親の慈愛こゝに至れば、凡そ世に不孝の子なかるべし、親の慈愛かくの如くにして猶その子の不孝なるものは、寧ろ憐れむべき奴なり、

往昔、山間の僻村に親を殺せしものありて、領主これを刑せむとすれば、怒りて曰く、他人の親を殺せば罪となるべきも我を生みし我親を我手に殺せしもの何の罪やあると、領主その愚を憐れみて俄に刑せず、人をして三年孝經を説かしむれば、始めて驚き泣いて死を乞ひしといふ、世間の不孝なる奴、いづれも多少これに類せる心理作用なり、

往昔また不孝の子あり、されど親その不孝を責めず、わざと反對に我子の孝養を喜びて諸人に傳ふ、きくもの、更に疑はず、四方その子を稱揚して到るところ尊敬せしに、不孝の子は竟に眞實の孝子となりし逸話あり、妄りに親として其子の不孝を世間に鳴らすもの、聊か以て考慮するこころあるべし、

世に不良少年と稱せらるゝもの、四圍の誘惑以外、いかなる家庭に最も多きや、蟲の生ずるこころ必ず腐れり、不孝の子は悉く親の罪にあらざるも、こんな奴が出來たとて、これを生みし親その罪を他人に嫁すべからず、あゝいふ豪い子を持ッたといはるゝ時、その名譽を專有すべき親は功罪ともに擔ふべし、

朋友

朋友は他人と他人との最も親密なるもの、父母を同じうせる兄弟に次いで離るべからざるも

のなり、

世間まづ朋友の定義は、鄕里、年齡、趣味、性格、學校、職業その他の境遇を等しうして、出處進退、利害の關係、勢ひ相去るよりも相倚るの近きに快樂と利益を生ずるものとす、

されど竹馬の友と學窗の友に多少の競爭心を免れざるよりは、おの〳〵社會に出で〻出處進退と利害關係の離るべからざる朋友に親密なるもの多し、

意氣相投じて一見こゝに舊の如きものあれば、意志相反して十年の交はりを一朝に絕つものあり、利害に關せず只これ何となく懷しき友あり、得失に關せず只これ何となく蟲の好かぬ友あり、いや〳〵ながら家族の關係より友達に加へてやるといふ朋友あり、好まざれど鄕里鄕黨の關係より友達になつてやるといふ朋友あり、甚しきは彼等の眼が氣に入らぬとか此奴の鼻が癪に觸はるとかいふものあり、血肉系統の親戚兄弟にも親疎あるべき世の中とすれば固より他人と他人との朋友に好惡あるべき筈なり、

同じ海中に同じ魚類として鯛の居處あり鰯の居處あると一般、人を見るは友を見るに如かずの語、悉く中らずとも殆ど當を得たり、

さらに同化の理より朱に交はれば赤くなるの諺、朋友は選ばざるべからず、生涯たゞ一度に一人の妻を選ぶよりは簡易にして自由なり、

友誼、友情、最も人間の美德にして、いはゆる刎頸の友は異體同心の極に達すべく、家に兄弟なきは人力以外の數なれど、世に朋友なきは一種の恥辱なり、

但し朋友は廣く淺きより狹くとも深きを尊ぶ、苟も交際場裡の人を以て悉く我朋友なりとするは、朋友の解釋程度、あまり漠として廣きに過ぎたり、互に心と心を打明けて或場合には妻子にも告げざる祕密を安心の下に語り語らるゝもの、始めて眞の朋友たり、たゞ單に交際

するのみを以て朋友とすれば、朋友よりも既に四海兄弟の語あり、天下を舉げて皆これ朋友といふべく、君子達人の天下を友とするは、別に理あり、こゝにいふ朋友の意味にあらず、朋友の意味を詮じ詰めて解釋すれば、常に相扶け相救ふの結果、雙方より進んで犧牲たらむとするにあり、人は自己に利益を得て喜ぶものなれど、朋友は寧ろ自己の利益を割いて喜ぶもの、なほ男女戀愛の梅に等しく、もし其一人を女とすれば、殆ど情死沙汰なり、されど今日の人情、かくの如きは稀に見るべき千中の一にして、世間の實例、多くは雙方より只これ利を得むがための朋友のみ、利のあるところ仇敵も忽ち骨肉の如く相交はり、利のなきところ竹馬の友も忽ち分れて相反く、利によりて交はり利によりて反く、多少なほ恕すべし、甚しきは友を欺き友を陷れ友を賣りて自己の榮達を圖り自己の家産を肥すものあり、たま〳〵舊友に哀を乞はれて僅の金錢も借用證文と引替にする奴、その利息を取らざるは寧ろ今日の世間として親友の部なり、その友の我に利なきを知れば遠慮なく平氣で玄關拂ひを以て通常一般の事とす、

結局、今日の朋友なるもの、實は終始一貫せる人と人との離るべからざる友誼友情にあらず、人と人との中間に或目的と或利益とを介在して、その目的と利益のある間を互に朋友と稱し、その目的と利益の盡きし時は直に他人となり、只これ利を以て時々刻々に離合集散するものあり、

苦樂相伴ひ利害相伴うて人生の得失以外、こゝに始めて暖き友誼を生じ友情を保つべきも、只その利益と快樂とに這ひ寄り苦痛と損害とに遁げ出せば、いはゆる同醜同類の分取主義なり、加之も男らしき分割主義にあらず卑怯未練の分取主義なり、出すものは舌も嫌なれど取るものは石地藏の胸倉も取るといふ奴等の一時的會合なり、常に友達喧嘩の絶えざるは當然

の出來事にして、彼等これを世間體に友達喧嘩といへど、友達の名負いづくにある、實は財物に集れる餓鬼道の攫み合なり、

もし自己一個の力に及ばず人と人と相組んで利益を目的とすれば、よろしく社會に出でゝ公然たる營利的の共同事業を起すべし、合資會社、合名會社、その他いづれも自由自在なり、加之も商法の規定と法律の制裁とに於て喧嘩口論の面倒を省くべし、わざ〳〵何を苦ンで互に朋友と相爭ふべき、自己の生涯に殆ど幾人と限られたる大切の朋友を利益主義に供するは、利益の點に於て大小輕重を知らざる愚物なり、この愚物と愚物との寄合、見苦しき喧嘩に終らずして濟むべきや、

朋友は必ず利益主義の以外に於て朋友たるべし、もし已むを得ざる場合の金錢上に關すれば互の程度と境遇とに應じて、與ふるものに酬いらるゝ念なく與へらるゝものに酬ゆるの念なく、雅量淡懷、雙方たゞ當座緩急の有無を相通ずるに止むべし、いかに友達たりとも共倒れとなるべきは、與ふるもの與へらるゝもの、共に朋友の意味を沒却せり、されど物質以外の奔走盡力、援助救濟はあぶかぎり全身の誠意誠實を擧げて相應ずべし、つまり朋友は貯金の通帳にあらず、迷信の寄附者にあらず、人は寧ろ心の上に生けるものとして、その怖快と慰安とを最も近く最も厚く交換すべき精神的の結合これを朋友の意味とす、

一代の豪傑として近世に名を得たる政治家あり、その舊友また政治にありて元來の主義を異にせしがため、議場公會の外は交はりを絶ちて互に攻擊を止めず、激罵痛罵、殆ど犬猿も啻ならざりしが、其政治家は財に窮せず其舊友は常に赤貧洗ふが如く、年々の歲末に至るや、政治家より必ず二千圓づゝを贈りて曰く、こんなものが殘ッて困る、もし君に費ひ途はないかと、舊友これを細君に示して曰く、馬鹿野郎奴、かういふものを送ッて來やァがッた、戻

すも面倒だ、臺所の隅へ捨てゝ置けゞ、互に年々その語を繰返して贈り贈られ、加之も逢へば一言これに及ばずして益々雙方より冷罵痛擊を極めたり、二人ゞもに今は既に死せしが、近世に於ける事實談にして、殆ご雙方より負けず劣らず背負投げを事ごせる政黨者流また此美談あり、朋友の情誼ごゝに至りては男兒をして泣かしむ、

兄弟

兄弟姉妹ごもに同一の血ゞ肉ゞを分與せられて人類繁殖の上に形づくられ、父ゞ母ゞの生理的作用より產み出だされたるもの、根を同じうして同じ花の幾輪も咲けるが如し、されご花の形を同じうして色ゞ香に濃淡厚薄あるが如く、兄弟姉妹また有形上の體質を同じうして無形上の性質に相似ざるところあり、

同一のものより同一のものを分割すれば、必ず同一の產物を得べき筈なれご、人間の系統は案外の不完全にして、その遺傳また或特殊の徵候を除くの外、頗る不明瞭の結果を生ず、智者の子に愚者あり英雄の子に凡庸あり善人の子に惡人あるが如き、もしくは其正反對に出づるが如き世間幾多の實例は、强ち其子の父母に比較して嚴格なる批評を蒙れるのみならず、この系統說ゞ遺傳說ゞに對し人間は或程度ゞ或時期までは父母の生める子なれご、それ以上は殆ご社會の生める子にして、四圍の事情ゞ境遇の變化ゞ敎育の奈何ゞは父母の手より其子を奪うて社會の產物ゞなすの力あり、

父母の子たる間は父母の膝下にありて父母の慈愛に包まるゝがため兄弟姉妹ごゝに相和し、たまゝゝその喧嘩は寧ろ罪なき兒戲の爭ひなれご、既に父母を離れて社會の子ゞなりし後は、

兄弟姉妹こゝに相和せずして喧嘩また本氣の沙汰なり、兄弟を他人の初階級といへる諺、非認すべからざる事實多し、

たゞ父母に對し家庭に對し外その迫害に對する上より兄弟姉妹は相扶け相救うて協力一致すれど、兄弟おの〳〵妻を娶りて子を産み、姉妹おの〳〵良人に嫁して子を産み、兩々こゝに社會の人となりて相對すれば、多少いづれも互に同胞の情を薄らげ同胞の暖を減ずるのみならず、甚しきは寧ろ常識を盾とせる他人と他人の爭鬪よりも常識以外に無遠慮なる深酷を極め、殆ど先ヲ的の復讐に等しく相敵し相呪ふに至る、

同一の祖先より出でゝ同一の父母に生まれ同一の血と肉とを分與せられたる兄弟姉妹は、この祖先と父母と血と肉との外、また或程度と或時期まで養育せられ教育せられたる以外、たゞ父母の任意譲渡を感謝して其他に何物も要求すべからず、これを要求せむとすれば、既に社會の人となれるもの、勢ひ遺産分配の葛藤を生じ易く訴訟を起し易く、然らざるも餘儀なき自然の數に於て際限ある物件の分割は既に爭奪の種子を含む、兄弟姉妹こゝに同胞の情を殺がるゝ恐あり、

兄弟姉妹の不和なるは富貴の家に多し、兄弟姉妹の圓滿なるは貧賤の家に多し、わけて取る物なければ力を合はして助け合ふより外なし、

兄弟姉妹にして物質の分配競爭を除けば、餘すところ只これ性質の異なれるのみ、その性の異なれるは相爭ふがための異なれるにあらず、加之も離るべからざる祖先と父母と血肉の理によりて當然こゝに融和さるべき筈なり、他人の間に友誼友情ありて同一の模型中より鑄出だされたる兄弟姉妹に同胞同情の愛なかるべきや、もしそれ社會に立ツて各々その主義と定見の相違ふがため相爭ふが如きは、公私の分別上、寧ろ外に社會の進歩と人類の向上を意味

して、内に於ける兄弟姉妹たるに何の關係なし、志の小ならざる父母は却ッて喜ぶべし、兄弟もし喧嘩すれば父母の墓前に對して疚しからず立派に申譯の立つべき喧嘩すべし、たゞ年齢によりて前後の順序を說く以外、親戚知己をして仲裁の文句なからしむべし、

以上は圓滿ならざる兄弟姉妹の不和に關してのみ、兄弟姉妹の圓滿なるべきは說くの要なく、人間普通の事なり、わざ〳〵珍らしからぬ事に紙筆を勞するの價値あらむや、

親戚

親戚は大河より分れたる支流の如し、遠近深淺の差別あれど、いづれか竟に次第を逐ひ年數を經て、あかの他人となるべきものなり、

世の諺に遠き親類よりも近き他人といふ、いはゆる花より團子の意味なり、遠き親類は系圖調べと祖先の祭り以外、さらに何の用なし、加之も其系圖調べと祖先の祭りにさへ自己の利益なくむば避けて近寄らざるもの多し、

親戚の親戚たるべきは、現在まづ戸籍面の出入に載せられたるものを最も深しと見るべく、父母に直接の血統を有せるものと、自己に直接の縁類を繫けるものと、ある事情と必要の下に家系を捨てずして往來せるものとのみ、その他は殆ど親戚の名ありて實なし、

さらに嚴格なる意味より論ずれば、裁判所の證人に許されざるを以て親戚の範圍内とす、兄弟姉妹の父母より出づるが如く親戚また同じ水源より分流すれど、既に水源を去ッて四方に分流せるもの、凡そ親戚に誠意誠實の相通ずるは尠く、事の面倒は親類交際に起り易し、

家憲上に規定されたる親族會議は、多く必要の場合にして其結果に多少の功あれど、只わけ

もなく寄り集りし親類騒ぎは、所謂お祭り騒ぎの一種にして、加之も互に相下らず久濶の酒食に席順を爭ふが如き、或は過去の恩仇を詮議立して肱を張り目を剝き出すが如き、これがため絶久絶縁の愚を演ずること往々世間の例に尠からず、

あまり廣汎に過ぎたる家族制度の結果、その監視と干渉の餘儀なき衆目に迫られて、親類さへ文句いはねばと、あたら有望の事業を半途に中止するの已むを得ざるもの、世間幾何ぞ、また一家の衰運に屬せる時、これが整理の名の下に騒ぎ寄りし親類縁者なるもの、實際に整理の效を擧けしは稀なり、多くの結果は未だ知らざりし世間へ對して俄に貧乏の證據立せるのみ、もし其主人をして竊に獨立自營の挽回策を取らしむれば、或は倒れずして濟むべき運命も、わざ〳〵寄り集りて磯邊の舟を山に擔ぎ上げ、ごうも斯うもならぬ果に捨て去るもの多し、甚しきは他人の債權者よりも自己まづ天引に貸金の元利を引去り、さもなくば前後の混亂に乘じ現在の弱點に乘じて持ち出せし物を、深切顔に暫く預かり置くと稱して永久に返さず其まゝの猫糞に預かり置く奴あり、

事ある時、まづ身の用心して空手に馳せ集る親類縁者は、うかうか油斷すべからず、身代を捻ぢ直してやるといふ奴、多くは身代を捻ぢ潰しに來る奴なり、

他人さへ同情の涙あり任俠の行ある世の中に、そも〳〵血族分派の親類縁者として、かくの如きは實に不思議の現象なれど、この不思議は寧ろ世間一般の實例上、殆ど不思議ならざるほどに多し、

實は元來この親類縁者なるもの、その他人ならざるだけに却ッて往來出入の便を得、絶えず自由自在に踏み込み來りて猶更ら面倒なり、

一面また親類縁者は自己にも損害を蒙り易き點より、勢ひ他人に過ぎたる城壁を設けて常に

警戒を怠らず、動もすれば致さるゝの恐あるがため動もすれば致さむとするもの多く、人の爭ひは最も關係の密接にして加之も曲直の最も判然し難きこころに生じ易きは自然の數なり、たとひ祖先の遺烈に包まれ系統の人情に繫がれて、常に援助救濟の念を絶たざる善意の親類緣者たりとも、家憲に規定せし或場合と或事情との外、自己の運命は自己に開拓すべき今日の人間として、この親類緣者なるが故に喜ンで其援助救濟を受くべからず、親類緣者の力を唯一に賴むもの、親類緣者の富貴を世間に誇るもの、ろくな奴でなし、

伯父の厄介となり伯母の世話となり、從兄弟の救ひを求め姻戚故舊の助けを乞ふもの、餘儀なき正當の事情以外、十中の八九は放蕩兒の類にして、意志薄弱の寄生蟲的なり、

親類緣者は婚姻か葬式か祖先の祭禮以外、もしくは春花秋月の歡樂以外、さもなくば天災病氣の外然らざれば利害得失の外に往來して談笑の愉快を交換すべきものなり、親類緣者の不和と絶交は他人と二反對に寧ろ救濟援助の美事より生ず、惡事の結果は時に善後策あれど、善後の惡結果は殆ど治め難し、

親類緣者の多きは家門の繁昌として誇るに足れど、親類緣者に家門を支へられ一身を保護せらるゝもの、實は他人に支へられ他人に保護せらるゝよりも不幸の極にして加之も到底その人間に前途の希望あるもの尠し、

同じ厄介たらば吝臭き親類緣者の厄介たらずして、寧ろ男らしく他人の厄介たるべし、さらに進ンで大に社會的の厄介物たるべし、

親類緣者の厄介物それが人間この上に餘力なき最後の意氣地なしなり、他人の厄介物は前途まだ多少の見込ありて他人の傘の下に入れらるゝもの、さらに進ンで社會的の厄介物もし一歩の運を開けば必ず何等か仕出來すべき人間なり、

主從

今日の主從は昔の君臣を意味せるものにあらず、只これ一家の主たるこのみ、雇人こ被雇人の關係なり、

德義上、被雇人より昔の主從を意味せるは嘉すべき美談なれど、雇人の力より強ひて昔の家來扱ひは出來ざるものこなれり、

これを商家にしても、おい小僧、肩を叩け、おい番頭その灰吹を捨てろこいふ時代は既に過ぎ去れり、まして家來ごも參れこいふ時代にあらず、うか〳〵すれば小僧に遁げられ番頭に飛び出され家來ごもに置き去りを喰ふ世の中なり、

強ち小僧こ番頭こ家來ごもの横著ばかりにあらず、時勢の光輝は平等に彼等の闇黑面をも照らして、賣られたる奴隷にあらず囚はれたる捕虜にあらざるを自覺せるがためなり、

加之も今日の小僧は寢小便の白雲頭にあらず、世間普通、殆ど尋常小學を卒へし生徒なり、

新聞も讀み雜誌も讀むに足る、急川には自轉車を要求し、正月こ盆こ年に二度の放し飼を以て滿足すべき筈なく、番頭また素丁稈の鼻垂れ送りに年數を經たるものならず、多くは商業見習の程度より以上を望めるもの、大福帳は簿記の簡便なるに若かずこし、切干大根こ豆腐殼の常食は衞生に害ありこ主張す、無論、月々の給料以外、店員たる名稱の下に二期の利益配當を請求するに至れり、

これが主人たるもの、また勢ひ古風の旦那然たるべからず、第一に年期奉公こいへる一種の束縛法を廢して、被雇人に對する總ての舊習を改むるこ共に、いづれも餘儀なく多少は會社組織の必要を感じ、たゞ食ふだけを有難さに駈け歩き走り廻る飼殺しの人間は一人もなきも

のこ覺悟せる結果頗る主人の主人振も態度を一變するに至れり、

されど今日なほ職人こ稱する部類には昔の主從に等しき師弟の關係あり、年期奉公また依然こして存在し、いはゆる親方は師匠にして弟子は追ひ廻しの家來なり、彼等の因習いまだ時勢の風に砌れざるは破れざるにあらず、竟には必ず破らるべきも、居職は讀んで字の如く外に出でず、その階級の社會に接觸せざるがため世に後るゝのみ、既に彼等の大なるものは工場こして、寧ろ他の商店よりは最も進歩せる組織を備へたり、

結局、今日の主人たるもの、人を雇ひ人を使ふに只これ衣食こ給料のみを與へて以て、それを無上の恩惠的に臨むべからず、彼は自己のためなりこ雖も我は我ために缺くべからざる必要の人間なり、大小輕重その程度に應じて必ず利益の幾分を配當せざるべからず、我使用人に多く配當を取らるゝは我利益ますます大なる所以にして、さらに主人たるもの、自己の用を便ずるこ共に人を養成するの義こ人を保護するの德なかるべからず、

商戰商略上、我士卒を冷遇酷使するは愚將の愚を演ずるに過ぎず、をり〳〵は不時の牡丹餅を以て頰を叩くべし、常に鞭をあけて人を追ひ使ふよりは遙に勝りて功多し、

また今日の人に雇はれ人に使はるゝもの、事に失策なく怠慢なきを以て精勤を誇るべからず、たゞ精勤のみなるは自己に酬いられ自己を利する所以にして、加之も主人に對する當然の義務なり兼ての約束なり、精勤以外に無形の誠意誠實なるもの、始めて忠なりこいふべし、さらに主家の不幸を來し不利を招ぎし場合は、奮勵一番、その忠負を主家のためこせずして寧ろ自己の腕を試すべき好敵手こすべく、事なき時また自己の使用人たるを忘れて自己のために働くべく、一面さらに主家は全然これ自己のために設けられたる學校こし修養場こして力むべし、衣食に心配なく給料以外に利益の配當をうけて損害の責任を帶びず、加之も自己に

取ッて他日成業の基を開くこころ、天下これほど便利に都合よく出來たる場處あらむや、
人を雇ひ人を使ふもの、その雇ひ道こ使ひ道を過れば、家の内に盜賊を飼へるが如し、
人に雇はれ人に使はるゝもの、その雇はれ工合こ使はれ工合を過れば、罪なくして監獄に投ぜらるゝが如し、
一方に益あれば必ず一方に益あり、一方に損あれば必ず一方に損あり、兩損、兩益、いづれも雙方の量見次第なり、

奮鬪

奮鬪は奮ひ鬪ふの文字にして、人間の勇氣を實行上に顯はせるもの、いはゆる精神一到、何事か成らざるの意味なれど、奈何せむ、今日の世間には何事も成らざる奮鬪家多し、
つまり人間の相場こ共に奮鬪力の下落なり、
斷じて行へば鬼神も避くこいへど、あたら斷行力に寵の上の猫も避けざる斷行家多し、
つまり意志の薄弱こ共に斷行力の安賣なり、
奮鬪奮鬪こ絶えず口に叫ンで殆ど世間の廣告的に奮鬪がる奴、實は奮鬪にあらず糞倒なり、
糞倒は糞倒れこ讀む、
また斷行斷行こ常に自慢らしく四方へ斷行の吹聽する奴、實は斷行にあらず勘考中にして、
斷行に達する途中の行止りなり、思案の拠首なり、
今日の奮鬪を叫ぶもの、その目的を聞けば、わざ〳〵奮鬪せずこも平氣に遂ぐべき至極安直の目的にして、薄志弱行なる其人間だけの奮鬪なり、實際の奮鬪家より見れば平々凡々、朝

飯前の仕事のみ、

斷行また同じく、殊更ら斷行力を要せずして直に解決すべき平易簡單の問題に向ひ、加之も頻りに斷行斷行を喚きながら本人なか〳〵斷行せず、せざるにあらず、その容易なる問題に向うてさへ、實は迚も出來ざる人間なり、

奮闘こ斷行こに限らず、名のみ大にして實これに叶はざる近來の人間、あまり事々物々に身分不相應の金看板を掲げ過ぎたり、もし社會を敵こして戰ふものこすれば、いたづらに外形の陣營を張りて兵力武器の空虛大名こ一般、敵を待たずこも自然の風雨に斃るべく、寧ろ憐れむに堪へたり、

これを人體に比すれば、いはゆる大文字屋こ稱する一種の畸形兒なり、胴體手足の細く小なる割合に頭ばかり重く大きく、その頭の動く度に中心を失うて重量に堪へず、前後左右、ひよろひよろこ不完全なる體格を運び出す工合、頗る珍なり、滿足の五體も歩武困難なる世の中を、かゝる不具者の無事に歩かるべき理なし、

一面また彼等は妄りに大膽なる言辭を弄しながら其實質は案外に極めて臆病なり、人の聲に驚かさるゝ奴、まだ多少の道理あれこ、自己の聲に驚いて自己の腰を打ぬかす奴、世間その例に尠からず、今日の奮闘家こ斷行家は多く此類なり、

人の世に處するは絶えず世の試驗に處せらるゝ所以にして、その問題の解釋上、その問題に外れざるかぎりは或程度まで無頓著の無遠慮に平氣に試驗を受くべし、あまり神經過敏に狼狽へて戰々兢々たるは、問題の答案よりも自己まづ試驗の聲に恐れて氣負するが如し、達人の事に當りて顚倒せざるは試驗こ平生この差別なき用意あるがためなり、

いはゆる今日の奮闘家は、その問題の平易なるに關せず、自己まづ自己の叫びし奮闘の聲に

恐れ奮闘の名に氣負して、半途の奮闘勞れこ奮闘倒れに終るもの多く、斷行家また然り、あまり事々物々に無用の力を入れ過ぎて尋常一般の普通狀態を天變地異の如く、過重視するの結果、山嶽震動して鼠一疋の諺に等しく、眼前の飯櫃を運ぶにも非常の斷行力を要し膳の上の小皿を取替へるにも非常の斷行力を要す、これが何の斷行なるべき、ちよいこ指端の藝にて足れり、

實際の奮闘力は人間の生涯に幾度もあるべからず、もしあれば奮闘の極、その一死を決するに至るべく、實際の斷行力を要すべき場合また其極は一身を賭せざるべからず、奮闘力こ斷行力、豈それ手足を動かすが如き容易なるものならむや、

やァ君、近來は實に僕も非常の奮闘力を續けてるよこいふ奴、奮闘にあらず、其日〳〵に當然の仕事を續けて居る奴なり、いよ〳〵思ひ切ッて斷行したこいふ奴の内容を聞けば、親爺に叱られて女郎買を止めたこいふ如き、愚にも付かざる斷行力なり、されこ此斷行力さへ當座遁辭の口端ばかりで斷行の出來ざる奴多し、

結局は器の小にして志の淺きがためのみ、つまり怠惰者の多き證據なり、元來の怠惰者、たま〳〵人竝の事をすれば鬼の首でも取ッた勢ひ、さも行々しく勞れて四方八方へ全身の大息を吹き出すものなり、

怠　惰

怠惰、文字上に於ける怠の解釋は、おこたる、たゆむ、うむ、つかるゝこ訓み、惰は、くらし、あなごる、あやまるこ訓む、以上いづれも人間行爲の不善不德にして、活動すべき約束

の下に生れたる正反對なり、世間の通語これを一口になまけものといふ、

怠惰者の口癖に曰く、人間の自然は無爲無心にして働かざるにあり、生物の原理は最も自己の生命を尊び最も自己の生命を安きに置く、その輕重を論ずれば一身を以て全地球にも代へ難し、電光朝露、人寰は僅に三萬六千日の百年に足らざるもの、うたかたの泡沫と消え行く世の中に、わざ〳〵何を苦しみ何を欲して何をか得べき、死後の名聲は生前一杯の酒に如かず、仇敵の身體を預かりて復讐的に取扱ふものにあらず、この大切な自分の我所有物を粗末にコキ使うて堪るべきやと、まづ大體これが怠惰者の常に申し上げまする序幕の口上なり、勤勉家これを排して曰く、人間の自然を無爲無心とすれば路傍の瓦石と一般この無用の長物を存在すべき理由なし、生物の原則は最も自己の生命を尊び最も自己の生命を安きに置かむがため寧ろ活動し努力し働いて稼ぐなり、全地球は偖置き、人は時に取ッて一片の義務のために死を辭せざるの勇なかるべからず、百年に滿たざる人生さらに行路を急ぐべく、生前一杯の酒、ごれほど美味きや、死して後代に名を殘すは人間に限られたる特殊の有難さなり、或程度まで我五體を殆ど粗末に扱ふが如きは或意味に大切なる任命を帶びたるがためなり、咄々この怠惰者、競爭場裡の駈足に面倒なり、踏み殺して飛び拔けとは、まづ大體これが額に汗する勤勉家の常に叫べる聲なり、

人間そも〳〵いづれに味方すべきや、社會そも〳〵いづれを取るべきや、

社會は常に社會の必要上と進歩上より絶えず勤勉家を歡迎し奬勵し保護せむとすれど、人間は人間の向上に反き發展に反いて絶えず怠惰者に味方し同情し雷同附和するもの多し、

世の中は手を引き腰を押して頻りに走れといへど、人は其手を振放し腰を卸して其まゝ其處に居坐りの睡眠を貪らむとするもの尠からず、

蓋し怠惰者は其性質よりも其境遇よりも其利害よりも、寧ろ其習慣にあるが如し、

乞食を三日すれば止められぬといふ諺は、その乞食を以て名譽と心得たるにあらず、また希望にもあらず目的にもあらず、たゞ働くが嫌さの極、乞食そのものゝ奈何を顧みるに遑なく、乞食しても急に餓死せざるがためなり、

乞食の餓死するものは、必ず其時に始めて目が覺むべし、されど既に遲し、もはや働く事の出來ざる時と一般、怠惰者また氣の付く時は多くの場合、後悔の間に合はぬ時なり、

ぶら〳〵と爲す事もなく怠けて竟に進退これ谷まると、きびきび立働いて常に面白き人生を快活に送ると、利害得失、固より比較するに足らざれど、一朝この睹易き取捨を逆りて習慣性となれば、既に怠惰者なり、たとひ怠惰者にあらざるも、習慣を破るの力は最も難し、

まして立派に一人前の怠惰者となれる奴、どうして容易に元の道へ歸らるべきや、ぶら〳〵其のまゝぶらついて止らぬ筈なり、

怠惰者の聊か仔細めいた奴、冷かに笑うて曰く、世間の凡俗ども何ぞ齷齪たる、三年飛ばず鳴かずの語を聞かずや、我は肱を枕に英氣を養へりと、されど斯る徒輩は多く肱を枕に女の夢を見るのみ、三年にあらず生涯そのまゝ飛ばず鳴かず、ぐうの音も出ずして終る奴なり、

怠惰者も文句のない怠惰者は多少まだ罪なきこころあれど、東洋流の豪傑を學び損ねたる怠惰者、これほど厄介な奴なし、彼等は英雄の蓄積力を怠惰者の無爲無能と取違へたり、加之も彼等その根柢なき大言壯言を以て、この怠惰病の病毒を世間へ傳染せしむるの恐あり、

怠ける筈でないが、つい怠けたといふ奴、既に自ら怠ける事の善からざるを知る、知りて猶これを改めず、やはり其まゝ怠け通すもの、實は怠けたい理由あるにあらず、もはや救ひ難き習慣その性となりて、怠けざれば氣持が惡く、勢ひ怠けざるを得ざる身體となりしがため

なり、アルコール中毒と一般、その害を知りながら飲まざれば寢られざる酒の如し、

されど怠惰者に種々あり、事業失敗の極、自暴自棄に怠け出すもの、不平不滿の極、實は面當半分に怠け出すもの、失望落膽の餘り悲觀的に怠けるもの、身體虛弱のため餘儀なく養生的に怠けるもの、職業なきため已むを得ずに當分だけ怠けるもの、其他いづれも何等かの或動機に作り出だされし怠惰者は、多少の恕すべき點と同情すべき點あるのみならず、また時と事の機會を得て再び囘復すべき希望あれど、例の豪傑氣取に怠ける奴と慢性の習慣病に怠ける奴は、迚も療治の見込なし、

活路

活路とは社會を敵とし人間を敵とし、その敵に迫害され迫窮されて、もはや再び戰ふべき餘力なく、進退これ谷まりし時に始めて見出だすべき一方の遁路なり、活路これ血路なり、

強ち社會は敵にあらず他人は悉く敵にあらざるも、餘儀なき生存競爭の結果、これを戰場とすれば、いはゆる刀は折れ矢は盡きたる時、其まゝ其處に討死するも殘念と心得て、捲土重來の再擧を期するがため、暫し身を忍ぶの術なり、

この術、いかにして得べきか、

火遁水遁の仙術にあらず、隱形祕傳の奇術にもあらず、人間おのおのその心にあるべき筈の術なり、これを簡單に說明すれば、たゞ心の轉換法といふ、

わざ〳〵むづかしき禪味の心機一轉を要せず、たゞ氣を換ふれば足れり、ひよいと氣をぬけば足れり、他人の心を轉換せしむれば頗る面倒なれど、自己の心を自己に轉ずるは、幸ひ手

に持ち合はせの物を捨つるが如し、

人は執著心によりて目的を達すれど、また執著心によりて人生を過る事あり、

勉強は事を遂ぐべき唯一の方法なれど、過度の勉強は事を遂ぐべき前に其身を破るの恐あり、

倒れて後に已むべき場合にあらざる以外は、人間さらに洒々落々として物に拘泥せず事に沈滞せず、君子の豹変、時勢の推移、事物の變化を知りて、未練らしく同一物に煩悶的の情死すべからず、男らしく去るものを去り捨つるものを捨つべし、

あぐまで嚙り付きの主義は時に成功すれど、たゞ嚙り付くのみが智者の工夫にあらず、あまり嚙り付き過ぎて離れざる結果、却ッて身を亡すもの多し、

熱心の極度、あまり熱して熱を起せば、人間の腦味噌を味噌汁にするの恐あり、この時に於ける一匙の冷水は沸騰を防ぐに足る、つまり心機の轉換法なり、

人間の處世は水に溺るゝが如く、藻けば藻掻くほど深水へ陥り、山また山に踏み迷ふが如く、走れば走るほど迷うて道を失ふべく、失敗また失敗の極に窮して、煩悶するほど猶更ら四方闇黒たるべし、かゝる時は最も人間その弱點に蔽はれ易く、いかに目を剝き出すとも眼球は既に勞れて見ゆる筈なく、寧ろ騒がず慌てず狼狽へず、靜に目を閉ぢて自己を事物の外に置きし後、おもむろに再び開けば案外の光明一點、いづれのところよりか必ず自己を照らすべし、

さンざ骨を折ッて馬鹿な事した、こゝから光明が射して居たのだ、これを知らずに今まで自分の尻で塞いで居たといふ實例、世間に多し、

人間は居坐りのきゝ腕を組ンで思案抛首の泣き事に耽るべからず、澁滯は進歩の害なり、さッさと尻をあげ手を廣げて活動すべし、九年面壁の功ありしは達磨のみ、通常人に壁に向う

て睨み合の效能、果して何物を得べき、

活路は死生の間一髪にあり、血路は四面包圍の一刹那にありといへば、いかにも大事業の失敗と大戰爭の慘憺とを意味すれど、人間かゝる場合は極めて少數にして、これほどの勢を以て當らずとも、世間普通の出來事に活路を求め血路を開くが如きは、生命無事に落付いて只これ氣を換ふれば足れり、

鼻下に俄の化膿せるものあり、名醫これを見れば殆ど生命に關すべき惡腫なれど、わざと平氣に笑うて曰く、これは何でもなし、たゞ貴公の重き病は腰より下にあり油斷すべからずと、眉を顰めて足の裏に藥を注げば、その人その無病なる足の裏に氣を取られて鼻の下の惡腫は竟に癒えたりといふ、兒戯に類せる一場の笑話なれど、死中活路の心機一轉に價する方便といふべし、

或人、夜盗に追はれて川に飛び込み、その川の深き水を巧みに潜りて遁れしが、ふしぎに衣服は濡れずして只その兩手と兩膝と顔中に過擦傷を受く、怪んで翌朝その川を見れば一滴の水なし、つまり周章狼狽の極、遁げし時は背も尻も高く丸出にぽッ立てゝ四這のまゝ顔と手と膝のみを小石河原に摺り行きしなり、これは事實談の本人、大に負惜みて曰く、眞に我ための血路なりと、

本人の顔と手足より流れし血路は血路なれど、一滴の水もなき小石河原を自由自在に立ッて走らず、わざと殊更ら無理に自己を押へ付けて四這に摺り行きし滑稽は、いはゆる血路にあらずして血迷ひし狼狽へ途なり、世間この四這流の先生また甚だ尠からず、

窮する時は氣を轉じて更に通ずべし、迫れる時は一旦その事を捨てゝ再び取るべし、追はれし時は後よりも前を見て途を選ぶべし、たゞ一事一物に囚はれて四方八方を密閉されしまゝ

殆ど化石の如く動き得ざるものは、死に至るまで活路なく血路なし、

困窮

困窮の文字、その一字を以ても人間を苦しめ人間の涙を絞るに足る、まして二字を重ねし勢ひに隙間なく容赦なく迫らるゝ時は、尋常の涙で濟まず血の涙を絞らるゝ事あり、その最も酷烈に慘憺たるは、その血の涙さへ封じられて、泣くにも泣かれぬといふ場合あり、

されど世間の困窮は、困窮すべき事よりも困窮すべからざる事に困窮するもの多し、

入らざる借金の返濟期限に困るもの、入らざる喧嘩の後仕末に困るもの、入らざる人の世話を焼き過ぎて困るもの、よけいな嘘八百の辻褄を合はすに困るもの、よけいな事に手を出して今更ら引くに引かれず困るもの、その他いづれも人事一般の上に自業自得の困り方、あけて數ふべからず、數へても詮なし、元來これは困窮すべからざるに困窮するものなり、

これに反して近來の貧乏神なか〳〵足が早く、稼いでも追ひ付かれず追ひぬかれて困るもの、力の足らざるにあらず時に利あらずして事業の蹉躓帥挫に困るもの、志は健全なれど身の健全これに伴はずして困るもの、不可抗力の天災に遭うて物の破壞消滅に困るもの、その他いづれも餘儀なくして已むを得ざるに困るもの、また擧げて數ふべからずと雖も、元來これは困窮すべき正當の理由に困窮するもの、よけいな事に入らざる事に出過ぎて困るものよりは頗る同情すべし、

されど同情すべきのみ、お氣の毒の至極なれど、或場合と或事情に限られたる以外、世間その困窮を無條件に引受けてくれるものなり、やはり自己の困窮は自己に背負ふべし、脊骨が

折れる腰が痛いと泣いても喚いても背負はざるべからず、いかに慾の深き世の中も、他人の困窮ばかりは貰ひ手なし、

社會は一面に於て頗る包容の大なる雅量あれど、また一面に於ては頗る迫害の急なる殘酷あり、どれほど聲をからして助け舟を呼ぶとも、助け舟に豫備なき時は、勢ひ見殺しにせらるる覺悟を極めて、東西南北、いづれの方面にか最も岸の近きところを望み、泳げるだけは泳がざるべからず、もし溺れて死すれば男子それまでなり、

正當の理由あるべき困窮にも、此覺悟と此觀念とを要すべき今日、困窮すべからざるに困窮せる自業自得の困窮者にして、その困窮を他に嫁せむとするものあり、甚しきは自己の困窮を救うてくれぬとて、人を恨み人を咒ひ人を傷くる奴あり、たとひ人に背負はされたる困窮たりとも、運わるく自己こゝに背負ひ込んだる以上は、卑怯未練に泣く音を發すべからず、

但し法律の制裁あるべき寃罪は別なり、

さらに困窮と人間とは程度問題にして、また比較問題なり、甲の困窮は必ずしも乙の困窮にあらず、丙丁また同じ理より一難ある毎に一倍の勇を奮へば、案外その困窮の平易なるを發見すべく、つまり困窮と人間の競走を始むべし、

競走、競走、たゞ敵手に恐れて困らず窮せず、大に起ッて競走すべし、たとひ互角の勢ひたりとも、起ッて走れば押潰さるゝに勝る、もし一歩たりとも先んずれば、困窮これ後足に蹴散らすべし、

困窮のため常に機先を制せられて、人間といふもの、脆い奴との念を起さしむべからず、戰ひの利は進むにあり、寧ろ我より勇を鼓して逆擊すべし、いつも敵手に勝癖を與へ我に負け癖のみ付いて堪るべきや、

生活

貧富と衣食住は說いて前篇にあり、こゝには單純なる生活の事實を問題とす、

瞬間も缺くべからざる人間の必要上、加之も人間當然の存在上、實は問題となるべき筈なくして、この生活問題ほど日夜四方の難問題に振廻さるゝものなし、生活難の三字、もはや飢に動かすべからざる熟語となれり、

そも〳〵人間の生活なるもの、果して今日の世間に叫ぶが如く至難の業なるや、

意味ある存在と進歩せる生活は、人間向上の理として種々の解釋と希望を有すれど、只これ簡易なる生活そのものゝ現實上は、生命を保つべしといふのみ、極言すれば飢ゑざるにあるのみ、さらに一歩を進めて餓死せざるにあるのみ、

餓死せざるを極度として、常に飢ゑざるを程度とすれば、殆ど禽獸に接近せしめて人間を侮辱するに似たれど、その侮辱を免るゝと共に其侮辱以上の生活を營むが如きは、敢て難事にあらず、これを難事といふもの、あまりに氣まゝ過ぎたる人間自己の罪なり、

動もすれば今日の人間、ずるい事を考へて、自己の生活難を社會の罪に塗り付けむとするものあり、自己は社會の分子にして社會は自己等の結合體にあらずや、その社會に罪を嫁するは自己と等しき他の人間に罪を嫁する所以なり、

一國の政治經濟は一國の民衆に利害得失の關係を有し、有するがために其利害得失を議すべき權能あれども、おのれ一家の生活狀態は直に以て一國の議題とすべからず、社會政策は別に社會政策として、自己の生活は自己に營むべし、いかに滯ればとて一國に家賃の責任な

く、いかに苦しくとも味噌醬油の代價は社會に支拂ふべき義務なし、

その最も低き程度を示せば、都會に住むもの雜沓の巷に捨てたる竹の皮を拾ひ集めても一人の口を餬すべし、田舍に住むもの稻雀を追ひ川蝦を掬うても一日の麥飯を得べし、まして世間それ以上の境遇にあるもの、世の不景氣を歎ずるよりも第一まづ自己の不量を歎ずべし、いやしくも無病息災の人間にして自家の生活上に自家を守り得ざるの道理あるべきや、耳の穴を掃除せよ、此ごろ世の中に聞ゆる生活難は生活談の間違ひなり、もし實際に生活難ありとすれば、これを免るゝに消極と積極の二途あり、

譬へば六尺四方の生活狀態に堪へざるもの、その半數の縮小主義を以て三尺四方の生活狀態に改むべし、また譬へば五尺四方の生活狀態に堪へざるもの、その倍數の擴張主義を以て十尺四方の生活狀態に改むべし、六尺を三尺に減ずるも五尺を十尺に增すも同じ理にして、進退增減これに當るの奮鬪力は一なり、百圓に苦しむもの百圓の世帶を半減の五十圓にして難を免るゝか、五百圓に苦しむもの五百圓の世帶を倍加の千圓にして奮鬪さらに奮鬪の結果その難を脫するか、いづれにせよ、三尺を三尺に守り五尺を五尺に守りて依然たる生活難の現狀を無理に維持せむとする奴は、前へも進まず後へも戻らぬ愚の極にして、いはゆる動きの取れぬ立往生なり、

立往生も只そのまゝ無言の立往生すれば、多少まだ憐れむべき點あれど、自己が勝手に立往生しながら他人のために立往立するが如く、不足がましき苦痛煩悶の悲鳴をあぐる奴、もはや論外なり、

職業

職業は人間の存在を最も明白に意味せる唯一の立證にして、社會の組織上いかなる職業も必要に伴へば必ず尊重すべく、職業の階級あれど職業の優劣なし、

但し遊廓遊里に於ける藝娼妓の類、青天白日の下に棲息せざる酌婦と淫賣婦の類、彼等も彼等に取りては一の職業なれど、人道上、風紀上、あまり存在を明白に意味せられては却ッて社會の迷惑なり、たゞひ多少の必要に應ぜる場合ありとも、これがため決して尊重すべき人間の立證にはなるべからず、たゞ彼等は何等かの名稱に託して營業鑑札を許され稅金を納めつゝありといふのみ、極言すれば一種の納稅動物なり、

その他は紙屑買も繿褸買も尊ぶべし、立ン坊も泥浚ひも輕ンずべからず、でい〳〵屋、笠を

深くせずとも敢て見苦しからず、焼場の穩亡も可なり、犬殺しも可なり、凡そ職業として卑しむべきものなく、たゞ階級の程度に於て低きのみ、

實業家とは實質物件を營業こせる意味にして、これに對する虛業家も空業家もなけれど、ここに無職業と稱せる一種不可思議の職業ありて、立派に其無職業を標榜し、絕えず社會の表面と裏面に隱顯出沒して、一定の業なく職なきも、寧ろ普通以上の生活を營み、その大なるものは肥馬輕車を驅ッて意氣揚々たり、されど鬼も出れば佛も出るもの、秩序的の今日には殆ど無用に屬して、本人また頗る安心の出來ざるもの多し、

學者、醫者、新聞記者、代議士、辯護士、文士、美術家、音樂家、官吏、教員の如きは、たこひ物質上に伴ふこ雖も、いはゆる無形業に屬せるもの、その他の農商工に關するものは、頭腦專門の發明家より手足勞働の工夫、車夫、馬丁の類に至るまで皆これ有形業に屬せるも

の、これを單に藝人としても都門一流の俳優より田舍まはりの法界節に至るまで、その他いれづも數へ來れは分業發達の今日、昔の商賣往來よりは幾百倍の多きに上れど、苟も職業とし營業として社會にあるもの、一も必要に伴はざるなし、

職業を社會の必要に伴ふものとすれば、人間の動くこころ必ず職業あるべき筈なれど、生活難の聲と共に職業また求職難の聲あり、

生活難と求職難は殆ど相通じて相隣るべからざる密接の關係あれど、苟も人として叫ぶを恥とすべき生活難に比すれば、これを選ぶに餘儀なき場合の多き求職難に寧ろ同情すべし、

されど求職難また自己の求職難にして、結局その責は自己にあり、みだりに職なきを歎じて他を恨むべからず、

自然淘汰と生存競爭の結果は、勢ひ多少の求職難を來すべき筈なれど、實は職を求むるの難きにあらずして、自己の希望する職を求むるの難きにあり、

つまり今日の求職難を歎ずるもの、多くは今日の職業相場を知らざるに基因す、たゞ自己のみ高く賣らむとして社會の相場上これを買はれざるがためなり、

加之も今日の學校を出でゝ新に世の中の職を求めむとするもの、社會は第二の學校にして寧ろ社會の活學を經ざれば社會これを用ゐざるの理を解せず、たゞ卒業證書一枚を以て直に過分の報酬を得むとするがため、こゝに求職難の聲を發せざるべからず、或經驗家の曰く、學校の試驗科目を悉く忘れて大切の卒業證書を紛失せしころ始めて社會有用の人物たるを得べしと、

學校の生徒は最高學校の卒業を以て滿足すれど、社會は案外その卒業證書に重きを置かず、社會みづから再ひ實際の試驗を行うて後にあらざれば、これに對して相當の地位も與へず報

酬も拂はざるものなり、

もし學校の卒業證書を其まゝ直に賣却せむとすれば、これを時價に買入れむとする社會の相場に應ぜざるべからず、但し特別の高價を支拂ふものは特別の實質あるがためなり、

文學博士が小學校の教員となり法學博士が巡査になるべき世の中は、まさか實際上あるまじき筈なれど、もし實際上その時代を來せば、勢ひ已むを得べからず、

さらに其他の求職難また同一理にして、たとひ自己の技倆と自己の勤勉とは依然たるも、社會の需川は時々に增減し代價は刻々に高低を示すがため、餘儀なく其增減と其高低に伴はざるべからず、殘念と無念とは算盤の外にして時價に加ふる事を得ざるものなり、

以上この理に反して絕えず喧嘩腰となるものは、常に絕えず求職難を免れず、以上この理に應じて絕えず時代と進退を共にするものは殆ど求職難の憂なし、

職業を求めざれば生活を得べからざるもの、生活のためには職業の奈何を論ずべき資格なし、

この膝を容易に屈すべからずとは、有形の財物か無形の主義か、いづれにせよ、屈せずとも足るべき何等かの信念あるがためなり、その信念なく川意なくして膝も屈せず腰も折らざる奴は、後へ反り返りて餓死するより外なし、

僕は職を選はない、何でもするが何もないといふ奴、これは職業に見放されし世の中の廢物なり、もし選ばざれば天下それ到るところに職なきの理あらむや、

容貌風俗

凡そ人間の出來事は人間の手に始末の付くべきものにして、責任上、また必ず始末すべき筈

のものなれど、人の容貌はかりは人の製造品にして最も人の自由ならざるものなり、

いかに巧妙なる美顔術が進歩せりとて、元來の美醜を飴細工の如く變ずべからず、白髪を染め皮膚を磨いて義眼入れ歯の醫術上に關する自由ありとも、人工上に四角な面を圓くし長い顋を縮めて出過ぎた額の高きを削るべからず、たゞ顔面の雜作に多少の手入を施して本人の氣休めとするのみ、

わざ〳〵實は他人の美顔術を受けずとも、本人の氣の濟むまで出來得るかぎり充分おめかしすれば足れり、

造鼻術は缺けたる鼻を造るにありて、有るは無きに勝れど、隆鼻術は似き鼻の胡坐を立直すに付いて頗る覺束なし、

結局、美顔術は舞臺に於ける俳優の一時的顔面術を聊か永久的の平常に行ふもの、否、行はむとするもの、その效果の有無は別論として、これがため本氣の沙汰に熱心の渴仰者たる徒輩は、果して如何なる人物なりや、苟も堂々たる男兒の恥づべき所爲なり、

もしそれ婦人に至りては、千古以來、みづから一個の裝飾物として、その術に於ける藝能は遺憾なく進歩發達せり、これさへ強ひて外より慫慂の競爭狀態を促すは社會上に寒心すべき弊害を生ず、まして男の面を卑劣なる或意味の下に殆ど玩弄的とするは、言語同斷なり、

男子の面貌は男子的に自然の手入を施すべし、蓬髪垢面を以て寧ろ世に誇れる一種の蠻風時代は既に過ぎたれど、世を擧げて男子こゝに俳優を學ぶが如きは、殆ど亡國の兆なり、

交際場裡、あまり見苦しきは人に對する惡感情を起さしめて、一面また自己の品位を損じ威嚴を失ふがため、これを禮節風紀の上より見るも、身體中に最も露出せる顔面の手入は怠る

べからず、たゞ不自然の上塗細工を避けて、いはゆる紳士の體面を保つにあり、

近世一代の豪傑といはれたる人、常に語りて曰く、鬚髯を蓄ふれば鬚髯を整ふべし、鬚髯を蓄へざれば剃刀を忘るべからず、ほしやく髯を生して自己の面にも手入の出來ざる奴、世間に向うて何の手を伸ばさるべきかと、倜儻不羈の名を得たる豪傑は案外この細心を以て人に接せり、

忙しくて湯に飛び込む寸暇もないといふ奴、忙しからざる閑暇な時も多くは面に垢ありて、實は無精者なり、

人は常に絶えず相應の程度に於て自己の容貌を整ふべし、また健全の體質に健全の精神は宿り衛生と愉快とは相伴ふべき理論の上よりも、意を用ゐて整へざるべからず、

容貌は敢て人格に關せざるも、人と人と相對し相會して第一まづ目に入るものは容貌なり、世間を以て悉く骨相學者ですべからざる以上、容貌の印象は感情の先驅なり、

さらに容貌は平生の手入れ以外、境遇の向上に從ひ意志の快活に應じて、知らず知らず自然の間に美化するものなり、元來の美なるものは益々その美に鮮明を加へて發揮すべく、醜なるものは其醜に何となく一種の貫目を添へて、寧ろ美なるよりも男性的の莊重を發揮すべし、

落魄衰窮の容貌を激變すると等しく、得意發展また人間の容貌を進歩せしむ、

この點より見れば、男子として何等の意味を有せざる俄細工の美顏術と美容術よりも、寧ろ他に奮闘して其向上發展と共に悠々たる自然の容貌を進化せしむべし、

容貌に對する風俗また同一理なり、

もし生若い青年輩のニキビ面に薄化粧を施して、ろくでもない顏の雜作を今日流行の美顏術に託せむとする奴あらば、これが父兄たるもの、手ぬるき意見を廢して大喝一聲の下に捻ぢ

伏せ、ゴシリこ一鉋かけてやるべし、

容貌また頗る食物の關係あり、敢て驕奢の美味を要せざるも、皮膚の光澤を增し輪廓の圓滿たらむこするには、生理的上、相應の滋養分を缺くべからざるこ共に容貌また身體の運動こ最も深き關係あり、常に絶えず快活の行動を取らざれば、その滋養分を寧ろ反對に腐敗分たらしめ、これがため却ッて容貌を毀損するの恐あり、

結局、容貌の自然進化は勢ひ社會の自然進化に伴うて、奮勵なく努力なき怠惰者の出來ざるものなり、

つまり男子の容貌を修むるは男子に對して容貌を修むべし、これを女子に對して修めむこすれば、いはゆる色男を氣取るものにして、勢ひ卑近に纖弱たらざるを得ず、

もし婦人これがために不平を起せば、遠慮なく勝手に不平を起さしむべし、もし婦人これがために男子を疎外すれば、宜しく平氣に疎外さるべし、

男女これ對照の論理上、女らしき女、必ず男らしき男を歡迎すべく、男らしからざる男を好く女は寧ろ此方で御免を蒙るのみ、

擧動態度

擧動の怪しきもの、態度の卑しきもの、いかなる場合こ事情あるに關せず、こもに人間行爲上の缺點なり、

擧動の明白なるこ、態度の明白なるは、いかなる場合こ事情あるに關せず、こもに人間存在上の品位なり、

警察の厄介になるべき擧動の怪しき奴ゞ、面前の喝破に追ひ出すべき態度の卑しき奴は、これを別ゝして、世間一通の交際上、まさか其まゝ警察にも引渡されざる擧動不審の怪物ありさりとて面前に叩き出す事も出來ざる態度曖昧の卑劣漢あり、

世俗これを油蟲といふ、

油蟲は取片付けたる座敷蟲にあらずして取散らせし勝手元の臺所の蟲なり、臺所の食物に生き勝手元の混雜に乘じ、公明なる日光を恐れて常に濕潤せる暗處を往來し、いかなる間隙も巧みに身を潜めて、ちよろ〳〵と敏捷に出入するものなり、

人間また此油蟲に類して、公明正大の議を恐れ、私語低聲の席を好み、加之も常に社會の闇黑を窺ひ人生の間隙に乘じ、只これ利益の甘きに出入して、さらに擧動態度の判然たらざるものあり、

擧動の不審ゝ態度の曖昧ゝは、自己みづから心中に何等かの疚しきこころありて、これを自白せざるも豫め防禦的に隱蔽せるもの、もし一歩を過れば殆ゞ犯罪行爲に近づくを恐るゝがためなり、

人間の擧動は自由にして他に拘束せらるゝ筈なく、人間の態度は適意にして他に左右せらるる筈なく、出へ進退ゝもに自己の行爲は自己の支配たるべき筈なれゞ、世間往々この自由に反し、適意に反して、わざゝ其擧動を不愉快なる不審の範圍内に置き其態度を不明瞭なる曖昧の云々中に置くものは、つまり世を欺き人を欺くの前まづ自己の良心を欺くがためなり、世を欺き人を欺くに智慧を要し功夫を要し、自己を欺くには最も良心に堪へ難き不快ゝ不善の苦痛ゝを忍ばざるべからず、その堪へ難き不快ゝ不善の苦痛ゝを忍びて折角の智慧ゝ功夫ゝを絞り出すに、その擧動を怪しまれ態度を疑はるゝが如きは、人生に於ける愚の極にして、

もし單に物質的の利益を目的とすれば、猶更ら以て差引勘定を知らざる遠算の極なり、そは舉動を立派にし態度を立派にして世に仰がれ人に稱せらるゝは、幾多の修養と元來の人格を要すべきも、只その舉動に不審なく態度に曖昧なきが如きは、世間普通の常識上、その良心の痲痺せざるかぎり何人にも易々たるべき筈なり、

この易々たるべき通常一般の事を以て、その舉動を怪しまれ其態度を疑はれて、常に交際場裡の注意人物となり朋友知己の間に警戒され疎外さるゝもの〻多きは、今日の人間、わざわざ入らざる事に骨を折りて最も拙い藝當を演ずるが故なり、

不即不離を以て舉動の不審と混ずべからず、諾否を一言の下に與へず去就を瞬間に決せざるは、寧ろ時に取ッて愼重の態度と見るべきも、これを態度の曖昧とすべからず、

死生

宗教家の死生論は宗教家に聞くべし、哲學者の死生論は哲學者に聞くべし、乃至また其間に於ける自己の發明は自己に於て發明すべし、

こゝに所謂る死生なるものは、現在の死生を以て直に現在の有無とすべき世間普通の死生論なり、

人は何處より來りて何處に住くべきかと問へば、靈魂と形骸との關係を論じて過去と未來とを說くの要なく、たゞ母の胎内より出でゝ墓地の下に入るべきものと答へて足るべき、其範圍内の死生なり、

生は死の第一歩にして生るゝは死する所以なり、一歩一歩その生を後に去り其死を前に望み、

歩むだけ歩めは必ず墓場に達すべく、たとひ歩まざるも無論に引摺られて墓場へ捨てらるべく、人間これほど明白に一定せる道理と順路なし、

されど人間この明白に間違なく一定せる死生の約束あるに拘らず、別に自己また生きて居るか死んで居るか殆ど死生の判然たらざるもの多し、

病氣、天災、その他の不可抗力に壓せられし半死半生の意味にあらず、ぴち〳〵と無事息災に五體を保ちながら死生の判然たらざるもの、もし浮世を夢とすれば、身を横へて枕を高く滿足の夢を見るにあらず、起きて居て寝言をいふもの、立ッて歩いて寝惚けるもの、甚しきは生涯を魘されて送るもの、世間の實例に頗る多し、

つまり人間存在の價値を有せざるものなり、極言すれば生きて生甲斐なく死して死晴のせざるものなり、いはゆる酔生夢死の徒、夢の中で酒を飲んで酔へるが如きもの、たよりなき夢と正體なき酒の酔を重ねては、重ね重ねの茫漠朦朧、いかなる道理も順路も判然たるべき筈なし、

人は我こゝに生れたりといふ自覺の上に何事をか爲さゞるべからず、我こゝに生きたりといふ存在の上に無意味たるべからず、さらに我また必ず死すべきものなりといふ覺悟を定めて、その最後を禽獸魚介の死と一般の消滅に終るべからず、

大小輕重ありと雖も、結局、その階級に應じ程度に應じて、人は其死生を明白に認められざるかべらず、必要は存在の價なり、わざ〳〵有無を問はれて本人みづから面を出さねで死んだか生きたか分らぬ奴は、社會に必要なく存在の價なし、

世に捨てらるゝと世に忘れらるゝとは同じ理なり、彼は近來ぐうしたと、たま〳〵閑談の席上に其名を呼ばれ、さういふ人間もあつたと、をり〳〵無用の座上に思ひ出さるゝは、既に

時代の要求を受けざる除外物なり、

たゞひ我より世を捨てゝ閑雲野鶴に伴はむとするも、たゞひ我より人を避けて社會の外に逸せむとするも、捨てられず忘れざるものは、寧ろ却ッて追慕渇仰の念を深くす、その人に限りし用があれば呼び戻さゞるを得ず、呼び戻しても歸らず其人の死せし時は、死後の名さへ喚び生けて社會の師表とするの用あり、聖賢、君子、達人、名士いづれも皆この類なり、

これに反して無用の人間は、いかに自己の廣告術を巧みに振廻して公衆の面前を離れざるも、たゞ蒼蠅く面倒なりといはるゝ外、その存在を認めらるゝ理由なく、その死生を顧みらるゝの價値なく必要なし、

實際また死んでも生きても差支なき奴の入らざる場所に出洒張りて、のこ〳〵平氣に四邊かまはず動くほど見苦しく目觸りなるものなし、

人間の死生は判然たるべし、その死生の判然たるは、その人の必要を示せる所以なり、

老少

老少は死生の間に於ける自然の順序なり、當然の行路に於ける一定の前後なり、少は生に近く老は死に近し、

少年と老年の相伴ふは、人生の平和を意味して、頗る快感を與ふれど、少年と老年の對照は、人生の悲慘を意味して、頗る無情を與へらる、

紅顔の美少年は忽ち白頭の老翁となり、今日の生を樂しむものは明日の死を悲しむに至る、その間を數ふれば僅に老少の一轉化のみ、

榮枯盛衰、なほ一年の春秋に花の開落あるが如く、加之も人間の生涯その一年を重ぬるこゝ幾何ぞ、

わけて婦人に最も老少の甚しきを認む、春宵一刻千金の月を宿せし梅花の馨も、いつしか去ッて皺くちやの梅干婆々となること早し、美人の鏡に對うて容色の笑を誇れるは、やがて其鏡も老の涙に曇るべき一瞬の前なり、面影の變らで年の積れかし、たゞへ生命にかぎりありとも、この歎聲いづこの婦人にか免るべき、

男子さらに容色衰退の歎なきも、事いまだ成らず志いまだ達せずして歳月は流るゝが如く、はや既に鬢髪の白きを見る、落葉は近し、誰か秋風に急がるゝの感慨なからむや、

されど人間の少年より老年に至るは生より死に至ること一般、今更これを倒に逆行すべからずとすれば、只これ自己の意氣を逆行せしむるにあるのみ、せめて心に年を取らざる工夫すべし、人は心の作用を以て慥に幾年の壽命を保つに足る、

少年は少年期の短きを忘れざると共に、老年は老の來るを知らざるが如き勢を以て、これを養ひ、これを培ひ、いはゆる老いて益々壯なるべし、

老いて衰弱すべきは年數の順序なれど、この一點のみは正當に順序を守るべからず、遠慮なく正當を踏み潰し順序を破りて老と戰ひ老と爭ひ老を驅逐すべし、老は墓場より來りて頻りに我を招ぐ嫌な奴なり、

氣が若いと稱せらるゝもの、必ず容貌の衰退を來すこと他よりも遲く、加之も年齢に不似合の元氣逞者なり、まだ老い込む年でもないといはるゝもの、多くは自己の心まづ老いて實際の年よりは墓場へ先走りせるものなり、

人間の最も超凡せるものは、その超凡せる事業以外、老いて衰ふべき自然の數理に反し世間

の當然に反し、老いて衰へざるにあり、老いて年と共に衰ふべきものを尋常人とす、
老いて衰へざるの道は生理上、衛生の注意と養生の方法とにあるべきも、衛生と養生とは寧ろ第二なり、事實また間斷なき衛生と養生とに保護せられて、やう〳〵一身の無病息災を保つものは、老の來ることを却ッて早し、
身體の虛弱なるものにして身體の强壯なるものよりは幾層倍の艱苦に堪へ幾層倍の事業を起し、加之も案外また却ッて長生するもの〻多きは、他なし、世間の所謂る衛生と養生とは自然の老衰を防ぐに足らざる一の反證にして、人は外部の修繕普請に長持すべからず、常に絕えざる內部の勇氣と元氣を以て張り詰めたる希望と事業の上に老を忘るべ丶、
つまり人は死に至るまで何等かの事務を取りて社會と沒交涉の無能翁たるからず、また人は死に至るまで常に何等かの希望と快樂とを絕つべからず、希望なく快樂なく取るべき業なきは、もはや人生の用なくして自己みづから墓場へ急げるもの、たとひ少壯たりとも實は既に若朽の人なり、まして老人の老朽たるべきは當然の理なり、
たとひ七十八十の年齡を重ぬるとも、みだりに喜んで御隱居樣の名稱を受くべからず、隱居の文字、本人は隱れて居るこの解釋なれど世間よりは這ひ出さずに隱れて居よこの意味にして、實は除外物にせる敬遠策なり、少々は憎まれても邪魔にせられても若い奴等に負けず劣らず、大に世の中へ禿頭の光輝を放つべし、腰の屈むは用なくして働かざるにあり、眼鏡は寧ろ當世の流行にして老人の證據にあらず、走るに電車あり人車あり馬車あり自働車あり、その酒色に近づき得ざるは却ッて人格を保つに幸ひの便なり、もし近づくも耽溺の恐れ尠くして老怪の勢ひ苦い奴等に一驚を喫せしむべし、
人生に經驗を要すれば老人これ最も經驗に富み、老人こゝに寡弱せざれば最も人生の行路を

長く歩める社會の先輩なり、

拜み倒し

小兒の恐怖と驚愕に迫りし時、おもはず我を忘れて父を呼び母を叫ぶと一般、既に成長せし人間また自己の力に迚も叶はざる時、これを自己以上の何物かに向うて救助を求め愛を乞ふの念を生じ聲を發す、人の神佛に對する皆この類たり、

同じ人間として同じ人間を拜するもの、また神佛を拜すると同一の理より出でゝ自己以上の長者に對し强者に對し師父に對する哀訴歎願と謝恩敬禮のためなり、

されど一點さらに感謝の念なく誠實の意なくして、たゞ妄りに神社佛閣の如く人を拜し人を

敬ひ人を祈るものあり、これを世に拜み倒しといふ、

拜み倒しは拜み奉りて何等か自己の目的物を得むとすれど、たゞ拜み奉るのみにては容易に得られざる時、相手を拜みぬいて竟に拜み倒すもの、蓋し横著物の油斷すべからざる藝當にして、實は叩き倒して物を取るよりも後始末の面倒なきがため、さしあたり眼前に拜み倒して取る奴なり、世間また威張りたきが人情の常として、拜まれたきもの多く、拜み倒さるゝもの多く、甚しきは拜み倒された上を蹂躙らるゝものあり、

人は他に向うて必ず尊敬と輕侮との兩面を有し、尊敬は自己以上に屈服せるもの、輕侮は自己以下に尊大なるもの、加之も屈服の不愉快にして尊大の意氣揚々たるものとすれば、世間普通の人情、いづれを取るべきや、

世の老獪なる曲物これを巧みに應用して、わざと殊更に自己を人情の不愉快なる屈服の下に

置き、その意氣揚々たるべき尊大の高座を敵に與へ、さらに拜み倒しの術を以て何をか覘ふ、覘はるゝもの必ず何をか取られて拜み倒さるゝ筈なり、

拜み倒しに馴れたる奴は、また巧みに空涙を流すの藝當ありて、最も能く人の弱點を知り、最も能く人の同情を引出し、殆ど自己を追はれたる窮鳥の如く人の懷中に入る、入りて餌を食ひ盡せば翼を伸して飛び去る事さらに早し、ぐづ〳〵すれば毛を拷られて燒鳥にせらるゝ恐あればなり、彼等これを脚下の明るいうちに去ること稱して、また一の藝當に數ふ、眞正面より武者振り付いて來る奴は、これを防ぐに寧ろ却ッて容易なれど、只この物あはれに涙を含ンで拜み倒しに來る奴、いはゆる油斷大敵の曲物にして、動もすれば防ぎ難く、まンまと首尾よく仕てやらるゝ事あり、

人を助け人を救ふは人情の美なれど、人に拜み倒され泣き倒さるゝは人事の愚なり、

但し世間は上に上のあるもの、この拜み倒しに來る奴を逆に拜み倒す凄い奴あり、かゝる徒輩は愚ならざるも智にあらず、たゞ最初より拜み倒しに來られざるを以て人間の要害堅固ならすべし、

踏み倒し

踏み倒しは拜み倒しよりも殘酷に聞ゆれど、その實は寧ろ罪に於て頗る淺し、拜み倒しは畏敬の假面を被りて人の脚下に屈服するがため、尊大を好むべき人情の弱點に乘じ、いたるところ直接に行はるゝも、踏み倒しは直接これを人の面前に行ふものなく、もし强ひて露骨に行へば忽ち摑み合の喧嘩となり、その多くは相手の目を忍び影を避けて物件の

上に行ふ、いはゆる借金の踏み倒しに於けるが如し、

人を倒したといふ通語は、實際その人を蹴倒し突き倒し踏み倒せし意味にあらず、十中の八九、その人の金を借り倒せしものにして、加之も或特殊の關係以外、倒した奴の必ず遁げ出すを見れば、その場に拜み倒して物を取る奴よりは、頗る恕すべき點あり、

家賃を踏み倒し米屋を踏み倒し味噌醤油の拂ひを踏み倒して夜遁する奴、實は踏み倒す量見なく、それ以上を踏み倒す力なく、これが人間の行止りとすれば、寧ろ憐れなり、

されど義理人情を踏み倒して遁けもせず走りもせず、悠々寛々と其まゝ其處に居坐りて平氣な奴、これは許すべからざる言語道斷なり、

但し世間の踏み倒しを見れば、わざ〳〵踏み倒さずとも何とか工夫の付くべき場合を工夫せず、たゞ當座の苦しまぎれと眠前の面目なさに踏み倒して遁け出すもの多し、遁け出せば既に踏み倒し以上の罪を重ぬるもの、其まゝ坐り込んで平氣な奴よりは多少の愛すべき點あるも、踏み倒す決心と苦痛とを以て何ぞ靜に立て直さゞる、

踏んで仕舞へ倒して仕舞へとは、飲んで仕舞へ潰して仕舞へと一般、今日ありて明日を知らざる現在主義の自暴自棄なり、現在こゝを踏み倒して一時の苦勞を遁るゝ奴、實際どこへ行きて今度は他より踏み倒さるゝほどの身分にならるべきや、

世間さらに踏み倒しを以て一種の快とし自己の手腕とせる奴あり、うまく踏んでやッた、首尾よく倒してくれた、面白いとは、元來そも〳〵何が面白いぞ、其場に捕へられざる盜賊を面白く愉快なりとすれば、もはや論なし、

もし世の中に踏み倒しなるもの絶えざれば、踏み倒すよりも人は踏み倒さるゝ方面に立つべし、踏み倒す奴は踏み損ねて自己に倒るゝ事ありとも、踏み倒さるゝものは案外に倒れざる

ものなり、仕てやるものは多く一時的の一角を缺くものにして、仕てやらるゝものは多く永久的の全角を保てり、

覘ふものゝ覘はるゝもの、既に大小輕重を意味す、取るものよりも取らるゝものは常に多く餘して、加之も取るものは失ひ易く取られしものは補ひ易し、

強弱

強弱は有形無形ともに人間の免るべからざるこころにして、自然淘汰と生存競爭の上より見れば、弱者の肉これ強者の食なり、弱いものは常に絶えず強いものゝ餌食とならざるべからず、眼前に血を流し骨を碎かれざるも、慘また慘ならずや、

されど雀は鷹の餌に生れず鰯は鯨の餌に生れず、たゞ好める力の強大にして好まるゝ力の弱小なるのみ、加之も時と處のため犧牲物となるのみ、犧牲以外の雀は飛べり鰯は泳げり、まして人間は同類相侵し同類相食むべからず、寧ろ強者は弱者を扶け弱者を救ひ、また弱者は強者に扶けられ強者に救はれて、こゝに幸福なる共同生活の平和を保たざるべからず、但し平和の謳歌時代は殆ど理想的のものにして、いかに宗教家の說法と平和論者の指導ありとも、事實の平和は或場合と或程度に限られたり、

萬國公法いまだ不完全にして國と國との間に戰ひの絶えざる以上、法律制度いまだ不完全にして人と人との間に爭ひの絶ゆる筈なく、爭へば必ず強弱の勝負を自然の結果に示して、強者は弱者を壓し弱者は強者に壓せらる、柔よく剛を制すとは、柔に似たる一端の剛を以て剛に似たる一端の柔を制するもの、全般の數に於て弱者の強者を制すべき理なし、

國に國防あり人に自衛あれど、國防と自衛とは絶對の不可抗力を備へしにあらずして、たゞ萬一の用意たるべきのみ、いやでも應でも弱いものは強いものに負けざるべからず、負けざらむとすれば弱者より強者たるの外なし、

いかにして弱者より強者たらむかとは、國家と人間との常に絶えざる研究問題なり、

社會は一面に於て強弱あるがために平和を保ち得ざるも、また一面この強弱あるがために人間の向上を促し社會の進歩發展を期すべし、もし強弱なく勝敗なくむば世の中に元氣なく活氣なく生氣なくして、只これ死物の蓄積場なり、

勢ひ強弱は社會の沈滯を警告し人間の油斷を叱咤するものにして、また生物の根底には悉く競爭の意味を有せり、もし競爭の外に逸し強弱の外に横はりて勝敗の數に關せず、勝ッても負けて實際どうでも宜いといふものは、人生の進路に伴はざる病人と不具者と其他いづれも社會無用の廢物なり、

強弱さらに爭はざる人情の上より見れば、この強弱は寧ろ冷かなるものにあらずして暖きものなり、餘れるを足らざるに補ひ、多きを少きに加へ、長きを短きに增し、弱きを強きに扶けられて、慈善、義俠、同情、その他に於ける人間の美なる產物は必ず強弱の間に生ず、大小輕重なくして救ひ救はるゝの數理あるべきや、

弱肉か強食と見たる殘酷は、強者を惡人視して弱者を善人視せしがためなり、社會また強者の惡人ます〳〵強にして憎むべく、弱者の善人いよ〳〵弱にして憐れむべきものなきにあらず、されど今こゝにいふ強弱は餓虎の群羊を驅るが如きにあらずして、強者とは人間必要の力量に滿てるもの、弱者とは人間必要の力量に足らざるもの、もしこれを善用すれば、強者それほどの善人ならざるも善を行ふべく、弱者いかに善人たりとも善を行ふ能はざるも

のなり、そも〳〵社會いづれに與すべきや、

加之も社會は常に絶えず競爭を促し勝敗を求むるがため、強者は必ずしも強者を以て終るべき筈なく、弱者また弱者を以て終るべからず、強者たるこ弱者たるこは人間の力を出すこ出さゞるにあり、

たゞへ力なくこも出せば出るものなり、人間さらに努力奮鬪すれば、元來の力ありて出さゞるものに勝る、

弱者その弱に凹垂れず、勇氣一番、うンこ強者に組み付いて捻ぢ合ふべし、強弱おの〳〵互に先天的の約束ならむや、人間こゝに現世の出來事なり、

巧拙

巧拙は俗語の上手こ下手なり、

人間に天才を無視すべからざるも、天才は多く特殊の技藝に屬せるのみならず、天才は常に天才を恃みて自慢倒れに荒み易く、寧ろ正直に間斷なき修養こ油斷なき努力より得たる鍛錬を以て世に處し事に當るべし、

つまり上手は勉强の褒狀にして下手は怠惰の罰則なりこいふ世間の多數決に加かず、

加之も下手は上手に達すべき階級なり、されご世の中には勉强しながら下手にさへなれぬものありて、折角の事々物々に糞を塗られ、いはゆる下手糞こ稱せらるゝもの、これは上手の天才こ等しく、やはり下手の天才なり、

上手の天才その天才を養うて荒まず絶えず發揮すれば、必ず萬人傑出の尊敬を受くべきも、下手の天才いよ〳〵その天才を下手に發揮すれば、ます〳〵世間より糞扱ひにせらる、

上手とは最も短き時間に最も多き事を手輕に爲すの意味にして上手の上なるものは更に結果の滿足と豫想外の成功とを加ふ、これに反せる下手とは最も長き時間を費して最も尠き事を手重く爲すもの、下手の下は更に結果の不滿足と豫想外の失策とを加ふ、その念入に下手な奴は自己の骨を折れば折るほど猶更ら萬事めちや〳〵なり、

但し上手の掌より水の漏る事あり、世間これを猿も木より落つるものとして認容すれど、たまたま下手の奮腕に何等かの事を爲し得れば、世間これを過誤の功名と稱して本人の手柄とせずどこへ廻りても下手は損なり、

また上手と下手とは必ず二人にあらず、これを一人に兼ぬるものあり、さらに上手は必ずしも智者にあらず、下手また必ずしも愚者にあらず、その道行と組立の頗る智者にして案外その仕揚に下手あり、その道行と組立の甚だ愚者にして案外その仕抄に上手なるものあり、結局、上手と下手とは人間全體の上よりも寧ろ一部一角の上に多し、

もし上手の上に名人なるものありとすれば、自然の順序として上手は名人の階級たるべき筈なれど、この名人は意外の特産物にして、寧ろ不意に下手より飛び出すこと多し、

されど名人になるべき下手は上手になるべき階級の下手にあらず、無論、糞下手にあらずして大下手なり、大なる下手なり、何となく大きいところのある下手なり、殆ど輪廓のない茫漠たる下手なり、なほ大愚の大物なるが如し、

名人と天才とは殆ど相一致せるが如く、加之も通例外の別に生ずべきものとしてこゝに上手と下手との解釋を簡單に求むれば、習ふよりも慣れよとの諺あり、手品の種は教へらるゝ

も急に行はれざるこ一般、上手は直に上手を傳授さるべきものにあらず、下手の次第に經驗を積み修養を重ねし結果にして、つまり巧拙は人力を費せし時日の長短にあり、

陽氣こ陰氣

陽は表にして陰は裏なり、陽は南にして陰は北なり、陽は男性にして陰は女性なり、陽は日の光にして陰は月の影なり、

さらに陽は仰ぎ陰は俯し、陽は開き陰は閉ぢ、陽は進み陰は退き、陽は浮び陰は沈み、陽は笑ひ陰は泣く、

人間これを性こして、いかなる質を示すべきや、人間これを氣こして、いかなる象に表はるべきや、

陽氣なる人間は社會の表面に顯はれて常に開發主義の進歩的なり、陰氣なる人間は社會の裏面に潜みて常に閉塞主義の退歩的なり、陽氣なる人間は生に重きを置いて絶えず樂觀的に横行濶歩し、陰氣なる人間は死に重きを置いて絶えず悲觀的に孤影獨居し、陽氣なる人間は白晝の賑はしきを好み、陰氣なる人間は夜の淋しきを愛し、陽氣なる人間は常に動いて已まず、陰氣なる人間は靜に止まりて動かず、陽氣なる人間は過去を忘れ將來を樂しみて現在の快活を保ち、陰氣なる人間は過去を忘れず將來を危みて現在の苦痛に沈む、陽氣なる人間は聲をあげて談笑し、陰氣なる人間は聲を忍びて呻吟し、陽氣なる人間は老いて少年の如く陰氣なる人間は朋年なほ老朽の如し、

陽氣の人間こ陰氣の人間、其いづれか最も人生に適して存在の意味を有せるや、

結局、陽氣は仰いで公明正大の域に達すべく陰氣は俯して陰險闇鬱の境に陷り易し、

陽氣の人間は陽發の極、動もすれば輕舉粗暴にして愼重の態度を缺くがため、あまり陽氣に浮かれ過ぎ陽氣に騷ぎ過ぎて、自己の失策は固より他に迷惑を及ぼし顚倒を惹起す事あれど、社會の發展と進歩とは寧ろ事々物々に顧慮せざる恬淡快活の此陽氣を以て常に時代の先驅たせり、たとひ逆ッて罪を犯すも其罪に殆ど憎むべき破廉恥の根柢なく、寧ろ多くは不用意の過失罪に止まれり、

陰氣の人間は陰鬱の極、動もすれば絶望自棄の悲境に陷り易きがため、内にありて外を知らざる猜忌嫉妬の念より世を呪ひ不平不滿の心より人を呪ひ、加之も聲なく音なくして執著心に強く復讐心に強く、これを散ずるに道なきの結果、もし罪を犯せば其罪や實に恐るべき意外の慘憺殘酷を極む、

また陽氣は常に希望を絶たずして快樂と共に成功を喜ぶの色あれど、陰氣は常に目的を捨て悲哀と共に破壞を願ふの色あり、陽氣は世の吉報を迎へ陰氣は世の凶報に伴ふ、さらに陽氣は衆と相和し陰氣は衆と相反く、その他いづれの點より見るも陽は榮榮を意味し陰は衰枯を意味せり、

人間の陽氣なると陰氣なるとは人間の幸福なると不幸なる所以なり、詮じて來れば樂觀と悲觀の外なし、

元氣と平氣

元氣とは散漫なる陽氣の精選物にして心理上の血液に等しきものなり、いかなる場合も不屈

結局、陽氣は仰いで公明正大の域に達すべく陰氣は俯して陰險闇鬱の境に陷り易し、陽氣の人間は陽發の極、動もすれば輕舉粗暴にして愼重の態度を缺くがため、あまり陽氣に浮かれ過ぎ陽氣に騷ぎ過ぎて、自己の失策は固より他に迷惑を及ぼし顚倒を惹起す事あれど、社會の發展と進歩とは寧ろ事々物々に顧慮せざる恬淡快活の此陽氣を以て常に時代の先驅こせり、たゞひ遽ッて罪を犯すも其罪に殆ど憎むべき破廉恥の根柢なく、寧ろ多くは不用意の過失罪に止まれり、

陰氣の人間は陰鬱の極、動もすれば絶望自棄の悲境に陷り易きがため、内にありて外を知らざる猜忌嫉妬の念より世を呪ひ不平不滿の心より人を呪ひ、加之も聲なく音なくして執著心に強く復讐心に強く、これを散ずるに道なきの結果、もし罪を犯せば其罪や實に恐るべき意外の慘憺殘酷を極む、

また陽氣は常に希望を絶たずして快樂と共に成功を喜ぶの色あれど、陰氣は常に目的を捨て悲哀と共に破壞を願ふの色あり、陽氣は世の吉報を迎へ陰氣は世の凶報に伴ふ、さらに陽氣は衆と相和し陰氣は衆と相反く、その他いづれの點より見るも陽は盛榮を意味し陰は衰枯を意味せり、

人間の陽氣なると陰氣なるとは人間の幸福なると不幸なる所以なり、詮じて來れば樂觀と悲觀の外なし、

元氣と平氣

元氣とは散漫なる陽氣の精選物にして心理上の血液に等しきものなり、いかなる場合も不屈

不撓を以て前途の希望に猛進し、ぐづ〳〵せず、びく〳〵せず、女々しからず、見苦しからず、愚癡を溢さず、泣言をいはず、敵に怖れず物に驚かず、寧ろ難事に快を呼び失敗に勇を鼓し、一難また一難これ面白しと踏み破ッて吶喊するものなり、

元氣の發するところ、元氣の進むところ、死滅の外は人間さらに生きて何等の障害物なし、

但し元氣は道理ある希望に向うて道理ある行爲に伴はざるべからず、希望なく道理なく只これ眼前の刹那に於ける元氣は頗る危險分子を含みて、動もすれば火藥の爆發と一般、迚も常識の爲し難き殺人その他の殘忍酷虐は凡て元氣の間違ひより生ず、間違はざれば元氣これ人間の精華なれど、もし間違へば元氣これ人間暴惡の極なり、

世間たゞ徒らに善人と稱せられて生涯さらに一の善事も行ひ得ざるもの、いはゆる槍持の槍を使はずして槍の目標たると等しく、善人の善を爲し得ずして善の看板たる所以は、皆これ元氣なきがためなり、

つまり元氣は實行の意味なり、加之も元氣を奮へば總ての普通を越えて、其人の力量以上に結果を生ずる英雄豪傑は強ち先天的の傑物にあらず、この元氣の充滿せるもの、この元氣の屈撓せざるもの、この元氣の永續せるもの、結局この元氣の習慣性となれるものなり、

内科に屬せる病人の半は、醫學上の病よりも寧ろ心理上の病にあるが如く、元氣あるもの容易に病を得ず、病を得るも容易に根柢を犯されず容易に死命を制せられず、なアに女と金に負けても病に負けるものかと、馬鹿げたる蠻勇一番の奴には病氣も聊か辟易の實例また尠からず、

そも〳〵生理的を以て組織されたる人間の病氣を恐れざるは愚の極なれど、人は生理上の原則のみを以て存在すべからざる以上、あまり神經過敏に病氣を恐れ病氣を重んじ病氣を大切にして座敷の奥深く引籠るは、却ッて病氣に乘ぜられ病氣に侮られ病氣を招ぐ所以なり、智

の極こいふべからず、をり〳〵は人間この病氣を大切にせず粗末に取扱ひ、玄關拂ひに叱り飛ばして追ひ蹕すほどの元氣なかるべからず、

元氣は勇氣なり、勇氣は活氣なり、活氣消磨し勇氣衰退し元氣亡滅して人間そも〳〵何のために生けるぞ、甚しきは風に恐れ雨に恐れて出づべき時に出でざる奴あり、冬は寒いこて火鉢に嚙ぶり付き夏は熱いこて煽風器を放れざる奴、汝元來、糊細工か、飴細工か、乃至また藁人形か、この元氣を積極的こすれば、いづれの時代より呼び來りし何物の姓名ぞ、その消極的に平氣の半左衛門こ稱するものあり、

平氣の平左衛門、また時こ場合により　何事も知らぬ顔の半兵衛こも稱し、別に雅號ありて蛙面馬耳郎こいふ、いはゆる蛙の面に水、馬の耳に風の意味なり、

されご平氣は多少いまだ元氣の香を失はずして、例の神經過敏なる臆病者の正反對に生る、寧ろ枯尾花に招かれて腰をぬかすものよりは勝れり、

平氣の特長は利害得失さらに關せず、窮達消長さらに關せず、毀譽褒貶の外に身を横へ、喜怒哀樂の外に肱を枕こし、叩いても起きざる時は起きず、引出だしても出でざる時は出でず、罵詈の下に動かず、嘲弄の下に怨まず、のそりこして動かず、ぼッこして顧みず、急かず慌てず騒がず狼狽へず、その悠々寛々たるこころを見れば、悟道せるが如く脫俗せるが如く、事物以外に超然たる人物の觀あれご、これを惡く見れば、最も感情の動物たるべき人間こして最も感情の遲鈍なるもの、常に活動すべき人間こして更に活動せざる無精もの、面の皮の千枚張に一切の刺激物を受けざるものなり、

されご平氣は事物に恐怖せざる大膽こ事物に煩悶せざる安樂こ事物に顧慮なき無頓著を有せるがため、時に何等かの意味あるべき人間これを適宜に處して害なきに行へば、寧ろ元氣を